

『My Travels in the Spirit World』(1927)

Caroline D. Larsen 著

【作品情報】

Caroline D. Larsen 著

『My Travels in the Spirit World』(1927)

【著作権について】

本作品の原文は、著作権保護期間が満了している
(パブリックドメイン)と判断される資料に基づいて
います。

【翻訳について】

本日本語訳は、公開者本人による独自翻訳です。
既存の翻訳や他者の著作物は一切使用していま
せん。

【注意事項】

万が一、著作権等に問題がある場合は、速やかに
対応(修正・削除)いたしますのでご連絡ください。

【翻訳者】

SEIJI

【免責事項】

本翻訳は個人による学術・研究・情報提供を目的としたものです。内容の正確性・完全性について保証するものではありません。

本翻訳の著作権は翻訳者に帰属します。無断転載はご遠慮ください。

2026/3/28

序文

いま、死後の生命に関する思索や研究が、人類の歴史の中でもかつてないほど人々の関心を集めているこの時代に、私が『Travels in the Spirit World』を出版することは、まことにふさわしいことのように思われます。

これまで、私たちと霊たちの世界とを隔てている幕を持ち上げようとするあらゆる試みは、すべて「ミディアム」を通して行われてきました。

しかし、この小さな本の中で私は、自分自身の目で見えた霊界の光景を描写し、実際に自分が参加した霊たちとの会話を語ろうと思います。

私がこれらの驚くべき出来事を皆さまに語る事が

できるのは、ごく少数の人しか持たない、ある特別な能力のおかげです。すなわち、肉体から離れ、しばらくの間アストラルの世界で生きる能力、実際には肉体の死を迎えていないにもかかわらず、霊として存在する力です。

さらに私は、自分が見聞きしたすべてのことの意味を考え、判断する能力と、それを記憶にとどめておく力も持っていたため、ここに来世についての知識を集めることができました。そして私は今、その知識を世に示そうとしています——それは、この問題についての直接の証拠とみなされるべき知識であり、私が信じるところでは、死すべき人間が得ることのできる唯一の方法によって得られた知識なのです。

このように、物質的なものから自分を切り離し、アストラルの世界で生きる能力は、私だけに特有の

力ではありません。

同じような能力についての記録は数多く存在しています。

しかし私の場合、物質的なものから離れることは、まったく自分の意志によるものではありませんでした。

読者は本書の冒頭の章を読めばわかるでしょうが、私はそのような力を求めたことも、育てようとしたこともありませんでした。

それは、私が気づかないうちに、いつの間にか私に備わっていたのです。

さらに言えば、私は、この思いがけない力を持っているからといって、自分が人より優れているとか、

超自然的な才能を持っているとか主張するつもりはありません。

私はそれを、単なる「能力」——たまたま一部の人が持っている、追加の力にすぎないものと考えています。

このような力によって得られた啓示について、世間ではほとんど耳にすることがありません。なぜなら、その力を持っている人たちは、それに注意を払わないか、あるいは完全に抑え込んでしまうからです。

私は読者の皆さまに、来世についての私の観察の結果をお勧めします。たとえそれを信じるに足るものとは認めない方々にとってであっても、少なくとも、一時的な興味以上の価値を持つものになるだろうと私は信じているからです。

私自身にとっては、自分が見、体験したことが現実であることに、少しの疑いもありません。非常に現実的なものなのです。

私の人生の中で、これほどまでに長く、そして鮮烈な印象を心に残したものはありませんでした。

そして私は、どのような旅行者であっても、自分の旅の体験が現実であったことを確信する以上に、私が自分の霊的な旅の現実性を確信していることはあり得ない、と断言できます。

私は、霊界の生活のすべてを見たとは主張しません。

実際のところ、私が見たのは、そのほんのごく一部にすぎません。

しかし私は、そのさまざまな姿のそれぞれについて、何かしらを見たのだと確信しています。

少なくとも、私の体験は非常に多様であったため、読者は、私たちが現在の世界を去るときに直面することになる状態について、かなり広いイメージを持つことができるでしょう。

もし私の記述が、ややまとまりを欠いているように思われるなら、その理由は、私が内容をふくらませたり、余計なことを書き加えたりするのを拒んだからです。

私は、この奇妙な体験の中で、自分が実際に経験した出来事だけを語ろうと固く決心しています。

それだけを目的としている以上、この小さな本に文

学的な価値が乏しいことや、その他の欠点について、読者があまり厳しく批判することはないだろうと、私は確信しています。

Caroline D. Larsen

『My Travels in the Spirit World』

1910年の秋、私はバーモント州バーリントンに住んでいました。ある晩、私はいつもより少し早く寢床に入りました。

頭の中にはいつものように様々な考えが浮かんでいましたが、それに加えて、階下から聞こえてくる音楽に私は強く心を引かれていました。私の夫はヴァイオリン奏者で、近く予定されている地元の演奏会のために、弦楽四重奏の練習をしていたのです。

演奏されていたのは、私の最も好きな作曲家であるベートーヴェンの四重奏曲でした。

私はその音楽を大いに楽しんでいました。しかし、時おりその喜びは損なわれていました。第二ヴァイ

オリンを弾いていた若いフランス人が、とても上手なアマチュアではあったものの、ときどき音程を外してしまうという不運を持っていたからです。それだけでなく、地元の商人であるチェロ奏者が、あまりにも大きな音で弾いていたことも、私の楽しみを妨げていました。

それでも私はしばらくの間、その二人の欠点に耐えながらベートーヴェンを楽しんでいました。ところが突然、私は非常に奇妙な体験をすることになったのです。

失神する前に感じるような、深い圧迫感と不安が私を襲いました。

私はそれに抵抗しようとしたが、無駄でした。

耐えがたい圧迫感はいっそう強くなり、やがてしび

れが全身に広がって、ついには筋肉の一つ一つが麻痺してしまいました。

私はしばらくの間、その状態のままでした。

しかし、私の意識だけは以前と同じようにはっきりと働いていました。

最初のうちは音楽がはっきり聞こえていましたが、やがてその音は少しずつ遠ざかり、最後にはすべてが空白になって、私は生命にもこの世界にも意識を失ってしまいました。

この状態がどれほど続いたのか、私にはわかりません。

また、その間に何が起こったのかについても、私は語るできません。

次に私が気づいたとき、私はベッドのそばの床の上に立ち、自分の肉体がそのベッドに横たわっているのを、じっと見下ろしていました。

私は、その見慣れた顔の一本一本の線まで見分けることができました。顔は死んだように青白く静まり返り、表情はこわばり、目は固く閉じられ、口は半ば開いていました。

腕と手は、力なく、生気を失ったまま身体の脇に横たわっていました。

私は、自分のその肉体をしばらく見つめていました。そのあいだ、さまざまな感情が胸をよぎりました。

奇妙なことに、それは大きな驚きではありませんで

した。

私は、自分がこのような異様な状態にあることに、ほとんど衝撃を受けませんでした。

私の心を占めていたのは、主として好奇心だったのです。

私は、自分がつい先ほどまで宿っていたその死すべき身体を眺めながら、完全に落ち着き、平静でいました。

私は自分の身体から目を離し、部屋の中を見回しました。

すべては以前とまったく変わらず、自然に見えました。

本や小物の置かれた小さなテーブルがあり、箆笥や化粧台、大きな肘掛け椅子、小さな椅子、床の緑色のカーペット、そして壺や花の模様が描かれた赤い壁紙がありました——眠れない夜によく数えていた、あの模様です。

そして、寝室を照らしている半分覆いのついた小さな電灯も、いつものようについていました。

私がこうして見慣れた品々を眺めている間も、階下からは音楽が私の耳に流れ続けていました。

私はもう一度、自分の身体を見ました。それは、どこから見ても死んでいるように見えました。

それから私は向きを変え、ゆっくりとドアのほうへ歩き、ドアを通り抜け、浴室へ続く廊下に出ました。

階段の脇を通過してその部屋へ向かって歩いていると、音楽はいつそう強く聞こえてきました。そして私は、ベートーヴェンの弦楽四重奏曲作品 127 のアダージョ——私が特に愛していた楽章——の美しさに心を奪われました。

浴室に入ると、その響きはしだいに小さくなっていきました。

私は洗面台の上に掛けられた大きな鏡に近づきました。

習慣で、私は電灯をつけようとする動作をしました。もちろん、実際にはスイッチを入れたわけではありません。

しかし照明は必要ありませんでした。私の身体と顔からは、強い白っぽい光が放たれていて、それが

浴室を明るく照らしていたのです。

鏡を見つめて、私は初めて、自分が驚くほど変わってしまっていることに気づきました。

そこに映っていたのは、中年の女性ではありませんでした。

私は、十八歳ほどの少女の姿を見たのです。

それは、若い頃の私自身の姿と顔立ちでした。

しかし私は、かつてよりもはるかに美しくなっていました。

私の顔は、最高級の雪花石膏から彫り出されたように見え、その肌は透き通っているようでした。髪に触れようとして持ち上げた腕や手も、同じように

透明に見えました。

まるで、それらの向こう側が透けて見えるようでした。

けれども、完全に透けているわけではありませんでした。腕や手や指の中心には、X線写真に見られるような、やや濃く、よりしっかりしたものがありました。

肉体に宿っていたときでさえ私の目はかなり良かったのですが、今の目は鋭く、驚くほど遠くまで見通せるものでした。

その目は強い輝きを放ち、その鋭い光が鏡に反射していました。

髪は、もはや灰色ではなく、若い頃のように濃い茶

色になっていて、肩から背中へと波打ちながら流れていました。

さらに嬉しいことに、私は想像しうる限り最も美しい、白く輝く衣服を身につけていました。袖のない、一続きのドレスで、首元は大きく開き、裾は足首近くまで届いていました。

私は自分の脚を見下ろしました。それも腕や首や顔と同じように、美しくなっていました。

私は鏡の前を行ったり来たりしながら、新しく手に入れた美しさにうっとりしていました。

真正面から自分の顔を見たとき、私は自分の目の強さと輝きに、むしろ恐ろしささえ感じました。

私は顔の前に両手を上げ、指を開いたり閉じたりし

ました。

その手は、とても軽やかで繊細に見えました。

けれども、そこに力の不足はまったく感じられず、動かしたときの感覚も以前と変わりませんでした。

自分がこんなにも美しくなっているのを見て、私の喜びと興奮は際限のないものでした。

私は夢中になって、その輝きを味わいました。

また、自分が肉体の外に出ている、アストラルの世界で生きているのだと意識することも、実に胸を高鳴らせる感覚でした。

その自覚は、一瞬たりとも私から離れませんでした。

鏡の前にいるあいだも、私は弦楽四重奏の音楽を、どこかぼんやりと聞いていました。

しかし今や私は自分の美しさへの満足を忘れ、注意深く耳を傾けました。

突然、メンデルスゾーンのヴァイオリン協奏曲の旋律が聞こえてきました。

私はすぐに、それを弾いているのがあのフランス人だとわかりました。

譜面台の楽譜を入れ替えているあいだ、彼がいつもそうしていたからです。

しかし、やはりいつものように、彼は音程を外していました。

私はいつものように不快になり、その瞬間、自分のことをすっかり忘れて腹を立てながら、こうつぶやきました。

「まあ！ 夫があフランス人に、きちんと調律してその協奏曲を弾くか、そうでなければまったく弾かないように言ってくれればいいのに。」

幸い、そのあとすぐに四重奏の演奏が再び始まり、ベートーヴェンの穏やかな音楽が私を落ち着かせました。

私はもう一度、鏡の中の自分を見て、その姿に見とれました。

しかし、自分一人だけでこの美しさを楽しむことには満足できませんでした。私は、ほかの人にも私を

見てほしい、そしてこの喜びを分かち合いたいと思ったのです。

私たちの家から一区画ほど離れたところに、B嬢という私の友人が住んでいました。彼女は、私の服装の趣味や、私の見た目について、よく褒めてくれていた人でした。

私は、彼女のところへ行って、自分を見せてやろうと思いつきました。

「彼女はどんなに驚くかしら！」と私は思いました。

「以前ですら私を褒めてくれたのだから、今の私を見たら何と言うだろう？」

「でもその前に」と私は考えました。「まず下へ行って、夫やほかの男たちの前に姿を見せてみよう。」

私は、驚きの表情が彼らの顔に広がる様子を想像して、おかしくなりました。

もし私が B 嬢のところへ行くことに成功したとしても、あるいは夫やほかの演奏者たちの前へ降りていったとしても、彼らの誰一人として私を見ることはできなかつただろう、ということに私は気づいていませんでした。もしかすると、誰かが「幽霊」としての私を見る能力を持っていたなら別ですが。

そう考えたとたん、私はすぐにその計画を実行に移しました。

鏡から離れ、私は廊下へ出ました。

私は、自分の計画がうまくいったときのことを思って胸を躍らせながら、軽やかな足取りで歩いてい

きました。

私は、自分の身体がとても軽くなっている感覚を楽しんでいました。

肉体の中にいるときには、脚を動かすには意識的な努力が必要ですが、今の私は、思っただけで自由に動くことができました。

それは実に素晴らしい感覚でした。

私が階段を下り始めたときほど、幸福な者は誰もいなかったでしょう。

ベートーヴェンの音楽は、先ほどよりもさらに美しく聞こえました。

一段一段進むにつれて、その響きはいつそう強くな

っていきました。

しかし、残念ながら、私の楽しい計画は実現しませんでした。そして、人々を驚かせ、感嘆させようという私の期待は、打ち砕かれてしまったのです。

ちょうど、階段が二つに分かれる小さな踊り場まで来たとき、私は目の前に、一人の女性の霊が立っているのを見ました。

彼女は光り輝く衣をまとい、両腕を広げ、一本の人差し指を上に向けていました。

その顔には強い決意が浮かんでいました。そして彼女は、厳しい口調でこう言いました。

「どこへ行くつもりですか。身体へ戻りなさい！」

これが私にとって初めての「肉体の外」の体験だったため、これ以上長くそこに留まることを許されなかったのか、それとも私が知らず知らずのうちに、このような体験を支配している何らかの決まりを破ってしまったのか、私にはわかりませんでした。

しかし私は本能的に理解しました。この霊の命令と権威には逆らうことができない、と。

私は従わなければなりませんでした。

私はしぶしぶ向きを変え、階段を上がり、廊下を通過して寝室へ戻り、ベッドのところまで行きました。

私の肉体は、私がそこを離れたときと同じように、静かで、生気のないまま横たわっていました。

私はそれを、嫌悪と失望の入り混じった気持ちで

見つめました。

どれほど醜く見えようとも、どれほど戻るのを嫌だと思おうとも、私はすぐに再びその身体に入らなければならないことを知っていました。

階下から聞こえてくる音楽もまた、私の心をいっそう悲しくしました。それは、自分が変わった姿のまま夫の前に現れることができなかった失敗を思い出させたからです。

しかし、考え込んでいる時間は残されていませんでした。

次の瞬間には、私は再び自分の肉体と一つになっていました。

私は息を呑み、身体を震わせながら、その肉体の

中で目を覚ましました。

最初は少し混乱していましたが、私はすぐに、いつもの落ち着きを取り戻しました。

そして、たった今経験した奇妙な出来事が、その鮮やかさのまま、私の前にありありと残っていました。

私は今や、自分自身の体験によって、人は肉体を離れ、アストラルの世界での生命を味わい、そして再び地上の身体へ戻ることができるのだという可能性を確信する立場になっていました。

私は今、再び自分の死すべき耳で音楽を聞いていました。

しかし間もなく、練習は終わりました。

私は夫に、自分の超自然的な体験について話しました。そして、階下で何が起こっていたかを互いに確かめ合いました。すると、私がアストラルの耳で聞いたことは、夫が練習中に実際に起こったこととして語った内容と、細部にいたるまで一致していたのです。

これが、私にとって最初の「肉体の外」の体験でした。

しかし、その後、私はたびたびこの特別な経験を許されるようになりました。

私は広大な空間を遠くまで旅し、さまざまな天体を訪れ、また霊界の多くの場所を訪れました。そこで私は、これまで世界に語られたことのないような事柄を見、聞いたのです。

前に述べた、私の最初の「肉体の外」の体験では、私は自分の家の中にとどめられていたことを思い出していただきたいと思います。

何らかの理由で、一人の女性の霊が、私が家の外へ出ることを妨げたのです。

しかし時がたち、このような体験が続くにつれて、私は少しずつ、より大きな自由を与えられるようになり、やがてかなり広い範囲を歩き回るようになりました。

最初のうちは、自分の家の近所だけを旅していました。しかし、アストラルの世界で自分を扱うことに慣れてくると、私はもっと広い旅に出るようになり、その旅は地球の大部分にまで及びました。

そうした旅の中で、私は、死の直後における霊の存

在について、完全な知識を得ました。霊たちがどのように暮らし、どのように行動し、どのように考えるのかを知ったのです。

ついでに言っておきたいのですが、ほとんどの霊は、自分にふさわしい世界へ引き寄せられていくまでのあいだ、しばらくは地上で生きていたときの環境にとどまっています。

その後、私は導き手たちの助けによって、霊たちの広大な世界を広く旅することを許されました。そこで私は、彼らの未来の存在を支配している条件について学び、霊たちの存在が見せる、さまざまな姿の生活を観察しました。

そして最後には、何よりも驚くべきことに、私は宇宙の深淵へと旅するという、きわめて特別な機会を与えられました。そこで私は、生命に満ちあふれて

輝く宇宙の壮大な光景を目にしたのです。

もし、私がこれらの機会に得た来世についての情報のすべてが、広く人々に受け入れられるようになれば、いわゆる「死」に対する現在の恐怖は、完全に消え去るでしょう。

愛する人を失ったことによる悲しみや絶望も、「死者」は以前にもまして生きており、その別れはほんの一時のもので、再会はすぐそこまで来ているのだ、という確信の前には、静かな受容へと変わらざるを得ないでしょう。

それでは、これ以上前置きをせず、私は死後の生命についての物語を始めようと思います。

私はこの物語を三つの部分に分けます。

第一に、死の直後における、この地上での生のあり方について述べます。

第二に、霊たちが実際に住んでいる世界での生活を描写します。

そして最後に、宇宙全体を満たしている、脈打つ生命についての私の観察を語ることにします。

「地上での霊の生活」

「死というものは存在しない」という言葉は、古くから、愛する者を失って嘆き悲しむ家族や友人を慰めるために用いられてきました。しかし、それは実際に、文字どおり真実なのです。

というのも、肉体が死によって静かになるや否や、その死すべき身体から、ついさっきまでそこに宿り、この世で自分を表すためにそれを使っていた人格そのものが、歩み出てくるからです。

その人は今、別の存在の輝きの中に立っています。地上の肉の牢獄の中で送っていた、短く限られた人生を捨て去り、永遠で、無限の可能性を持つ生命へと移っているのです。

人間は、三つのはっきり異なる部分から成り立っているとと言えるでしょう。

第一は、自我、本当の自分、真の人格——よりわかりやすい言葉を使えば「魂」です。この魂はアストラルの身体の中に存在し、そのアストラルの身体は、さらに肉体の中に包まれています。

死がその肉体に訪れると、霊は新しい身体の中で生き続けます。

したがって、その人格に関するかぎり、死というものは存在しません。

あるのは、ひとつの生き方から、別の生き方への変化だけです。

私たちは物質的な考え方に慣れているため、この変化を、何か曖昧で、確かな実体のないもののように考えがちです。

このよくある誤解の典型的な例は、挿絵入りの雑誌などに見られます。そこでは霊が、煙の渦巻く柱のようなものとして描かれ、その上に奇妙にゆがんだ人間の顔が浮かんでいるように表現されていることがよくあります。

しかし、そのような描写ほど真実から遠いものはありません。

肉体を離れた霊は、私が最初に「肉体の外」に出たときと、まったく同じように見え、感じ、考え、行動します。

霊の身体は、その形も見た目も肉体と完全に同じですが、その身体は、肉体が粗い物質でできているのに対して、はるかに繊細な物質でできています。

その繊細な物質は、私たちの肉体の感覚では知覚できないほど速い振動に合っています。

しかも霊にとっては、そのアストラルの身体は、肉体に宿っていたときの肉体とまったく同じように自然で、確かなものとして感じられるのです。

私が浴室の鏡の前に立ち、新しい身体の姿に見とれていたとき、私は、別の部屋のベッドの上に横たわっていた、あの死すべき肉体の中にいたときと同じくらい、自分が現実の存在であると感じていました。

手を握ったり開いたりするときも、向きを変えるときも、廊下を歩くときも、身体のあらゆる部分に力と生命が満ちあふれているのを感じました。

そこには、新しくて恐ろしい感覚など、まったくありませんでした。

唯一感じられた違いは、不思議で、むしろ心地よい軽さと浮かぶような感覚でした。

しかも、以前の身体が持っていたあらゆる感覚——見ること、聞くこと、触れること、味わうこと、匂いのかぐこと——はすべて新しい身体にも備わっているだけでなく、それらははるかに鋭くなっていました。

霊は、この世にあるものも、霊の世界にあるものも、すべて見ることができます。しかし霊の世界では、肉体を持つときのような視界の限界は存在しません。

霊の目がそうであるように、霊の耳もまた同じで

す。

霊の耳は、肉体の耳ではまったく聞き取れない音を感じ取ることができます。

ほかの感覚も同じように、さらに鋭くなっていきます。

私のアストラルの耳には、階下から聞こえてくる音楽が、これまでにない美しさを帯びて聞こえてきました。

私は、それほど澄み切り、それほど繊細な音を、これまで一度も知りませんでした。

また、私のアストラルの目には、周囲のものが、これまで知らなかったほど鮮明で、生き生きとして見えていました。

さらに私は、浴室に立ったままで、夫と、階下にいたほかの三人の男たちの姿を、その間にあるあらゆる壁や障害物を通して、はっきりと見ることができました。

しかし、感覚は、物質の世界からアストラルの世界へ移ることで、より敏感になって変化するものの、心そのものには、ほとんど何の変化も起こりません。ただ一つ加わるのは、他人の考えを読むことができるようになるという能力だけです。

人は、肉体を離れたときのままの心で、アストラルの世界に目覚めます。

私の心の状態について言えば、私はただ、地上での生活をそのまま続けているだけでした。

すべての霊も同じです。

多くの霊は、このような心の状態と、アストラルの身体が自然に感じられることのために、自分がまだ物質の世界に生きているのだと思い込み、以前と同じように生活を続けようとしています。

また、死を越えたあとでも、記憶が失われることはありません。

アストラルの世界にいたとき、私は自分の地上での生活のあらゆる細部を覚えていました。

私は、自分が誰であることを完全に知っていました。

自分がアストラルの身体をまとった時まで、何が起こっていたのかも、はっきりと理解していました。

霊たちについても、事情はまったく同じです。

このことは、私が地上で知っていた霊たちと会話したときに、何度も確かめられました。

彼らもまた、私たち二人が知っていた昔の生活の、ごく些細なことまで思い出すことができたのです。

霊の世界には、老いというものはありません。

アストラルの身体は年を取ることができないため、老衰も存在しません。

霊がアストラルの世界に入ると、その人は、自分が最も充実していた時期の姿をとります。

子どもとして霊の世界へ入った者は、アストラルの身体の中で成長し、成熟した姿に達します。

アストラルの身体が肉体の完全な写しであるように、男は霊の世界でも男であり、女は女のままです。

その人の特徴や、男性らしさ、女性らしさも、変わることはありません。

霊たちも、人間と同じように衣服を身につけています。これは霊の世界における変わることのない決まりであり、どの霊も、身体を覆うものなしに現れることはできません。

その衣服は、次のようにして現れます。

すべての霊からは、強いオーラ、いわば燐光のような光が放たれています。

このオーラは、完全に心によって支配されています。

身体を覆う衣服は、この光の物質から形作られるのです。

最初のうち、つまり死の直後には、その形作る行為は、ほとんどの場合、無意識に行われます。

霊は肉体から離れると同時に、何らかの形で衣服をまとっています。たとえばそれが、ただの経帷子のようなものにすぎなくてもです。

しかし、しだいに心が自分を支配できるようになるにつれ、衣服をまとふことは意識的な行為となり、その服装は、その人の好みに大きく左右されるようになります。

そのため、死の直後には、心はまだ地上での考え方や習慣に完全に支配されているので、霊たちは、死ぬ前に着ていた服装を、そのまま身につけていることが多いのです。

だから、私が最初にアストラルの世界を歩き回ったとき、最初に目についたのは、地上の服装をしたまま、あちこちを歩いている霊たちの奇妙な光景でした。

霊の世界では、オーラの色が、その霊の性質を示しています。

暗い色はすべて、発達の低い状態を表しています。

霊が成長し、高い状態へ進んでいくにつれて、オーラの色はしだいに明るくなっていきます。

もちろん、このオーラの色は、霊の衣服の色も決めています。

したがって、霊の人格、性質、成長の程度は、その衣服の色によって示されるのです。

死んだ霊たちの中には、自分が今どのような状態にあるかを、私が自分の状態について考えたのと同じように、すぐにはっきり理解できる者もいます。

ほかの霊たちは、自分に何か奇妙なことが起こったのではないかと、ぼんやり感じています。しかし彼らは、その事実をどうしても認めようとせず、それを心から追い払うために、わざと以前と同じ地上の活動を続けようとしています。

そのため、自分の状態に心が合っていない彼らは、

自分に何が起こったのかを、はっきりと考えることができません。そして、ゆっくりと時間をかけて、ようやくその状態に慣れていくのです。

しかし、大部分の霊たちは、心があまりにも混乱しているため、自分が大きな変化を経験したことに、まったく気づいていません。

彼らは地上の身体を離れると同時に、すぐに、これまでと同じ生活を始めます。

実業家は、すぐに事務所へ向かい、仕事を指図し始めます。そして、自分の命令がなかなか実行されないことを不思議に思い続けます。

旅行者は、自分では荷物を持っているつもりで、いつもの路線を走る列車を探します。

裁判官は、法廷に座り、訴えを聞こうとします。

しかし、なぜか何も思うようには進みません。

弁護士は依頼人を探しますが、見つけることができないか、あるいは正しい法廷にたどり着くことができません。

教授は熱心に学生たちに講義をし、なぜ学生たちがいつものように自分に注意を向けないのかと、腹を立てます。

主婦や女主人は、自分が計画した集まりのために、客たちを集めようと必死になります。しかし、努力はまったく実りません。

職人や労働者は、楽しそうに仕事場へ向かいます。しかし、何ひとつうまくいかないのです。

中には、いつもの店に入って何かを買おうとする霊もいます。しかし、店員の姿を見失ってしまったり、支払いに必要なお金を忘れてきたことに気づいたりします。

また別の霊たちは、馴染みのレストランへ入り、席について、好物を注文します。

しかし、給仕はひどく無礼で、まったく相手にしないか、注文した料理を運んでこないのです。

そのような扱いに腹を立て、彼らは別の店へ行きます。

しかし、どこへ行っても、同じ結果しか得られません。

こうして彼らは、それぞれ、地上でのいつもの生活を続けようとしています。しかし、いつも自分の望みと自分との間に、説明のつかない壁があることに気づくのです。

彼らは、いつもの行動をしようとしても、そのたびに理解できない力によって邪魔され、何をしてもうまくいかない夢の中にいるように生きています。

親しい家族や友人が自分を無視することにも、自分がいつも果たしてきた目的が完全に失敗することにも、彼らは驚きでいっぱいになります。

しかし、誰も彼らの思い違いを正そうとはしません。

まず第一に、そうすることは許されていないのです。なぜなら、自分がどういう状態にあるかを知ら

ない霊に、そのような事実を突然告げれば、取り返しのつかない結果を生むからです。

それだけでなく、ほとんどの霊は、そのような話を聞こうとしません。彼らは激しく怒り、自分には何も異常なことは起こっていないと強く否定するでしょう。

そのため、最初のうちは、誰もそのことについて問いただしたりはしません。誰もが、この世と同じように、自分自身で思い違いを捨て、自分なりの考えを、少しずつ形作っていかなければならないのです。

なぜなら、死んでも心そのものは変わらないからです。

私は旅のあらゆる場所で、この霊の国の新しい住

人たちが、町の通りにあふれ、家々を出入りし、列車に乗り、船で旅しているのを見ました。

実際、地上の人々が暮らしている場所には、どこにでも霊の世界の住人たちもいるのです。

ですから、実際には、この地上には、人間と同じ数だけの霊が住んでいるのです。

私にとっては、自分がその異様な状況について考えることができる立場にありながら、にぎやかな通りを見下ろし、霊たちと生きている人間たちとが入り混じっているのを見ることは、不思議な光景でした。

私はときどき、生前に知っていた霊たちの家へついて行くことができました。

彼らは、いつも使っていたベッドに横になり、何度も慰めを与えてくれた長椅子にもたれ、いつもの安楽椅子に座り、家族の食卓では、昔から決まっていた自分の席に着いていました。

しかし、彼らの顔にはいつも苦しげな表情が浮かんでいました。愛していた人々の誰一人として、自分のことを認めてくれないように見えたからです。

落ち着きを失った彼らは立ち上がり、群衆の中へあてもなく歩き出し、この謎を解く助けとなってくれる何か、あるいは誰かを探し求めていました。

私は、そのような霊たちとも、また自分の置かれている状況の真実を理解している霊たちとも、よく話をしました。

しかし、ほとんどの場合、彼らのほうから先に話し

かけ、私に近づいてきたのです。

私は、こうした出来事や会話のいくつかを、ここで語ろうと思います。それらは興味深いだけでなく、霊の心の状態を理解する助けにもなるからです。

ある時、C 夫人という、生前に知り合いだった感じの良い女性が、私に近づいてきました。

彼女は、自分が死を越えてこちらへ来たことを自覚していました。

穏やかな微笑みを浮かべて、彼女はこう言いました。

「あなたが私に優しい気持ちを持ってくれたこと、そして私が亡くなったとき、あなたがどれほど悲しんでくれたかを、私は見ていました。そして、あな

たが送ってくれた美しい薔薇を、本当にありがとう。」

彼女は、私が彼女の葬儀に送った花のことを言っていたのです。

「もし、今のようにわかっていて、見えていたなら、物事は違っていたでしょうに。」

彼女は、彼女の親族の一部が嫉妬から語った噂のせいで、私たちの間に起こった誤解について言っていました。

そう私に言うと、彼女は立ち去っていきました。

私は返事をしませんでしたでしたが、とても嬉しく感じました。

彼女は美しい霊でした。

そのオーラは明るく、衣服は白かったのです。

それは、霊として成長していることを示していました。

別の友人である M 嬢は、自分の葬儀が行われているあいだ、自分の家にいました。

私は好奇心から、そこへ行って見たのです。

彼女の心はひどく混乱していて、ぼうっとしているようでした。

彼女は、自分が死を越えたことに気づいていませんでした。

そのため、棺の中に横たえられているのが、自分自身の身体だということも理解していなかったのです。

しかし彼女は、両親が自分のことで深く悲しんでいることには気づいていたようでした。

彼女は必死になって、自分がすぐそばにいて、何も悪いことはないのだと、両親にわからせようとしていました。

ところが、両親が完全に自分を無視しているように見えるので、彼女は非常に困惑していました。

彼女は私のところへ歩み寄り、とても興奮した様子でこう尋ねました。

「これはいったいどういう騒ぎなの？ 私はここにい

るのよ！ ここにいるのよ！」

私は、彼女の状態について真実を教える言葉を、一言も口にすることができませんでした。死んだばかりの霊に、そのようなことを自分から伝えることはできないからです。

そのような知識は、ゆっくりと、自分自身の力によって得なければならないのです。

私から助けを得られないとわかると、友人は急に向きを変え、深い苦しみの中で家を出て行きました。

私が出会ったある男性は、非常に良い印象を私に与えました。

彼は、デンマークにいた頃、長年にわたって私の弁護士を務めてくれていた人でした。

彼は立派な資質と誠実な人格を持った人物でした。

彼は私の弁護士であっただけでなく、私が誇りを持って友人と呼ぶことのできる人でもありました。

私がアメリカへ来たあとも、彼は故国に残る私の用事を忠実に処理してくれていました。

ところが、突然、彼からの手紙が来なくなったのです。

私は彼の死を知らされてはいませんでした。きっと亡くなったのだらうと思っていました。そうでなければ、彼が私を放っておくはずがないと知っていたからです。

ところが、あるとき私が歩き回っていると、その友人——ローゼンガードという名前の人——が、私の前に現れたのです。

彼は、真心のこもった友情をたたえた目で、しばらく私を見つめていました。

私が彼だと気づくのに、それほど時間はかかりませんでした。私が最後に地上で彼を見たとき、彼は六十歳の男性でしたが、今の彼は、最も充実していた頃の姿になっていたのです。

「覚えていますか」と、彼は話し始めました。「あなたがデンマークを離れるとき、私は、何が起ころうと、あなたがどこにいようと、いつでも誠実にあなたを助け続けると約束しましたね。」

「私はその約束を守りました」と彼は続けました。

「もう守ることができなくなるまで、ずっと。」

「あなたから最後の手紙が来たとき、私はすでにこちらへ来ていたのです。だから、あなたは返事を受け取れなかったのです。」

彼が話し終わる前から、私は、彼が真実を語っていること、そして彼が真の友人として、いつも私に誠実でいてくれたことを知っていました。

彼は、優しい微笑みを浮かべたまま、伝えるべきことを伝えると、私のもとを去っていきました。

私は、そのような形で良き友人と再会できた喜びに包まれながら、しばらく彼が遠ざかっていくのを見つめていました。

彼は霊として、かなり良い状態にあるように見えま

した。オーラがかなり明るかったからです。

しかし、まだこちらへ来てそれほど長くなかったの
で、彼は生前と同じ服装をしていました。つまり、燕
尾服に、いつもの縞模様のズボンをはいていたの
です。

私たちの再会は、本当の友情は墓の向こうにも存
在し、そして続いていくのだということを証明して
いました。

私が出会ったある女性の霊——B 夫人——は、自
分が地上の生活を去ったことを、まだ知りませんで
した。

彼女の心は怒りと苦しみで満たされていました。長
い結婚生活のあいだ、夫が示していた愛情が偽り
だったことを知ったからです。

「今では」と彼女は言いました。「あの人は、私が一緒に貯めるのを助けたお金を浪費する女と暮らしているのです。」

私は、それ以上の話を聞きたいとは思わず、すぐに彼女のもとを離れました。

私は、ある男性の霊とのあいだで、少しおかしい体験をしました。その人は、生前には社交界、実業界、文学、芸術の世界で非常に名の知られた人物でした。

このH氏とは、夫と彼が共通の関心を持っていたため、私はとても親しくなっていました。

夫も私も、彼と、彼の家族と、たいへん親しい付き合いをしていたのです。

私は、いつもこの人を高く評価していましたが、同時に、どこか苦手だという気持ちも抱いていました。

その感情は、霊の世界でも再び現れました。

私がある広い野原を横切っていたとき、誰かがすぐ後ろを歩いていることに気づきました。

振り向くと、何と、そこにいたのは、あの旧友 H 氏でした。彼は熱心な様子で私を見つめながら、後について来ていたのです。

彼は亡くなったときには、かなり年を取っていましたが、今は若々しい姿になっていました。

しかし、私は彼だとすぐにわかりました。

奇妙なことに、彼はまだ、生前と同じ灰色の背広を着ていました。

彼だと気づくとすぐ、私は決然として顔をそむけ、足を速め、まっすぐ前を向いて歩きました。

しかし、私のその冷たい態度も、彼をあきらめさせることはできませんでした。彼はなおも、私の後について来たのです。

それはしばらく続きました。

ついに私は庭園に入り、ベンチに腰を下ろしました。もう彼も、自分の態度を恥ずかしく思い、立ち去るだろうと考えたのです。

しかし、私は間違っていました。

彼はまっすぐにベンチへ来て、その反対側に腰を下ろしました。

彼は身を乗り出し、目をきらきらさせながら、私の顔をじっと見つめました。どうやら、私が冷たくしたことを後悔させ、たぶん、私が彼に話しかけてくれることを期待していたのでしょう。

しかし、そのような彼の態度も、私の気持ちを和らげることはありませんでした。

私は彫像のように冷たく、無関心なまま座っていました。

ついに彼は口を開きました。

「私たちは地上ではよく知り合い、親しくしていたで

はありませんか。なぜ、こちらでも仲良く続けることができないのですか？」

しかし私は、返事をする必要さえず、誇らしげに立ち上がり、重々しい態度で立ち去りました。

しばらくのあいだ、彼は私の後を追っていましたが、やがて私は、彼がいなくなっていることに気づきました。

私は、地上では現代の王妃であった女性の霊に出会い、それが誰であるかを見分けました。

彼女は、生前には大きな権力と広い人気を持っていました。

しかし、今の彼女の生活は、かつての華やかな生活とは、あまりにも対照的でした。

彼女のオーラはかなり明るい色をしていましたが、彼女は、頭と身体を覆う経帷子のような、ごく簡素なものを身につけているだけでした。

地上での王妃としての華麗な姿とは、何という違いでしょう。

彼女は、自分が死を越えたことも知らず、ぼうぜんとした困惑の中を歩き回っていました。

彼女の権力は失われ、誰も彼女に注意を払いませんでした。

彼女は、自分が置かれている現在の状況を、どうしても理解することができなかつたのです。

彼女の心はあまりにも混乱し、ぼんやりとしていた

ため、考えることさえできないように見えました。

彼女は私には気づきませんでした。

私はただ、好奇心から、しばらく彼女を見つめていただけでした。

この王妃の姿や状態とは、著しい対照をなしていたのが、別の王妃でした。その人は、生前、その長い人生を満たしていた親切さと惜しみない善行のために、人々から深く愛されていました。

私は、彼女がずっと住んでいた宮殿で、その王妃に会いました。

彼女は今なおそこにとどまっていた。私の理解では、彼女はまだ、生前に続けていた善い行いの生活から、完全には離れていなかったのでしょう。

彼女は私にこう打ち明けました。

「まだ、少しだけ、やりたかった仕事が残っているのです。そして、それを終わることができなかったのが残念です。」

このように美しい霊のそばにいることは、本当に心地よいことでした。

彼女のオーラは非常に明るく、彼女は、美しい形をした純白の衣服を身につけていました。

私は、この高貴な霊は、もうそれほど長くここにはとどまらないだろう、と感じました。やがて彼女は、自分によりふさわしい霊の世界へと引き寄せられていき、そこで、自分の高貴な仕事を続ける機会を与えられるでしょう。そして、地上で始めていた成長

を、さらに進めていくのだらうと思いました。

しかし、彼女の夫である前国王が、私が彼女と一緒にいるときに宮殿へ入って来たとき、私は彼については、まったく違った印象を受けました。

彼のオーラは明るくありませんでした。

実際、彼のオーラは暗い色をしていました。

彼はフロックコートに縞模様のズボンを着ていました。

彼は、自分がどのような状態の中で生きているのかを、十分には理解していないようでした。

それでも彼は、王らしい威厳を保っていて、自分の王妃と一緒に私がいるのを見て、いささか驚いて

いるようでした。

しかし彼が本能的に理解していたことが一つありました。それは、かつて自分の王妃であった、この美しい霊のそばにすることで、自分が何らかの利益を得られるかもしれない、ということだったようです。

けれども彼女は、優しく、しかしきっぱりとした態度で、彼が自分の近くにとどまることを許しませんでした。

彼は、傷ついた誇りを抱えているような様子で、重い足取りのまま私たちのもとを去っていきました。そして、まもなく私も、その元王妃の前を離れました。

私が出会った若い少年の霊は、恐ろしい心の状態

を示していました。彼は私のそばを通り過ぎるとき、あざ笑うような顔をしました。

「お前の頭を割って、脳みそをぶちまけてやる。」

彼はそう言って、恐ろしく悪意に満ちた目で私をにらみつけました。

この少年は、恐ろしい犯罪のさなかに死んだばかりでした。

彼はまだ、自分が肉体を持っていると思い込んでおり、悪魔のような楽しみを続けたいと思っていたのです。

彼の色は非常に暗いものでした。

幸いなことに、霊の生活を支配している法則によっ

て、ひとりの霊が、むやみに他の霊へ干渉することはできないようになっていきます。

もしそうでなかったなら、この少年は、地上で行っていたのと同じように、霊の世界でも恐ろしい犯罪を続けていたことでしょう。

次の出来事は、私にとって非常に興味深いものでした。なぜなら私は、その人の人格が、何度も肉体の中に入ったり出たりし、最後には完全にそこを離れていく様子を、実際に目撃したからです。

G氏は、私の夫にも私にも、よく知られている人でした。しかし、私たちが彼と親しい間柄だったとは言えません。

彼は酒を多く飲む人で、その悪い癖に、何度も支配されていました。

ここでは詳しく述べる必要はありませんが、ある特別な悩みのために、彼は完全に理性を失ってしまい、酒と麻薬に溺れる生活に入り、ついにはそれによって命を落としました。

彼が死んだ夜、私はたまたま霊の身体で外へ出ていました。

彼の家の前を通りかかったので、私は中へ入ってみました。

ベッドの上には G 氏が横たわっていました。麻薬と酒の飲み過ぎによって、ひどい痙攣を起こしていたのです。

ベッドのそばには、二人の男が立っていました。彼らもまた、G 氏のために何かをしようとしているの

だと、私はわかりました。

(このことは後に、夫の努力によって確認されました。)

突然、私は、G氏がアストラルの身体で起き上がり、肉体から完全に抜け出すのを見ました。

すると彼はすぐに、ベッドの周りを熱心に探し始めました。半分ほど残ったウイスキーの瓶と、隠してあった小さな麻薬の瓶を探していたのです。

彼はそれらを見つけ、口に運ぼうとしました。

しかし、それができないとわかると、彼の顔には失望の表情が浮かびました。

それから彼は、自分の身体のところへ戻り、たちま

ち再びその中へ入りました。

しばらくすると、彼はまた肉体から抜け出しました。
そして、再び同じことを繰り返したのです。

彼はそれを何度も繰り返しました。そして不思議な
ことに、彼が身体を離れるたびに、その身体は死ん
だように静まり返り、彼が戻ると、たちまち恐ろしい
痙攣を起こしたのです。

ついに彼は最後に身体から出てきました。そして、
また瓶を探し始めようとしたその時、突然、彼は私
に気づきました。

彼は背筋を伸ばし、呆然とした驚きの表情で、私を
まっすぐ見つめました。

それから顔をそむけると、ひどく混乱した様子で、

よろめきながら家を出て行きました。彼は、自分が二度と戻ることのない肉体を後に残してきたということを、まったく知らなかったのです。

意味深いことに、彼が身体から出るたびに、そのオーラはただちに彼を包み、彼がいつも着ていた背広に似た服を形作りました。

しかし、その服は茶色でした。それは、彼に霊的な成長がほとんどないことを示していました。

R氏という若い霊は、生前には有名な俳優でしたが、自分が死を越えたことにまったく気づかず、幸せそうにしていました。

彼は、生前の服装の趣味そのままに、しゃれた灰色がかった背広を、いかにも几帳面に着こなしていました。

彼は私のほうへやって来ると、手に美しい花のようなものを持ち、それを振りながら、華やかなタンゴを踊り始めました。

その花は、おそらく自分の邸宅の庭から摘んできたつもりでいたのでしょう。

彼は踊りながら私の前を通り過ぎ、そのとき私の顔をじっと見て、とても魅力的な微笑みを向けてくれました。

私は振り返り、彼が急いで遠ざかっていくのを見ていました。

彼がそんなに急いで、どこへ向かっているのだろうと思い、私は好奇心から彼の後を追いました。

やがて私たちはニューヨーク市へ着きました。そして彼は、生前によく通っていた、有名な夜のカフェへ、まっすぐに入って行ったのです。

中へ入ると、彼はテーブルに座り、足を組み、気取った様子で、そこにいる客たちを見回し始めました。同時に、給仕のひとりの注意を引こうとしていました。

そこには、生きている客がかなりたくさんいましたが、霊たちもかなりいて、その中にはテーブルに座っている者もいました。

また何人かは、生きている人の椅子の後ろに立ち、その人の肩に肘をつけていました。

さらに、一人の女性の霊は、ピアノの上に腰を下ろしていました。

私は隅の席に座り、R 氏を観察していました。彼は何度も頭を動かして皆を見回し、それでもなお、給仕が来るのを待っていました。

私は十分に好奇心を満たしたので、立ち上がって帰ろうとしました。

ところが突然、R 氏が私に気づいたのです。

どうやら、私の見た目が彼の気に入ったようでした。彼は微笑みながら、私のところへ駆け寄ってきました。そして、少年のような熱狂のまま、私をさつと腕の中へ抱きしめたのです。

私は、そのような無礼な振る舞いに対して、生前であったなら感じたのと同じように腹を立てました。そして彼を振りほどき、急いでその場所を立ち去り

ました。

次の出会いは、霊の世界での生活が、自分の想像していたものとまったく違っていることを知った霊とのもので、非常に意味深いものでした。

私は W 嬢と、とても親しくしていました。

私は彼女をたいへん好いており、彼女が亡くなったと聞いたときには、とても悲しく思いました。

彼女の死からしばらく経ったある日、私がアストラルの旅をしていると、不思議な力に引かれて、彼女が住んでいた家へ向かうことになりました。

私はその家に入り、階段を上り、彼女の寝室だった部屋へ入りました。

そこには、長椅子にもたれている、かつての友人がいました。

彼女は私を見ると、それとわかる視線を向けました。しかし、それ以外には、ほとんど何の反応も見せませんでした。

私はすぐに、彼女が恐ろしく落ち込み、打ちひしがれていることに気づきました。

私は彼女に深い同情を覚え、そばへ近づき、肩に腕を回して、何がそんなに彼女を苦しめているのか尋ねました。

すると彼女は、完全にこらえきれなくなりました。

彼女は私の肩に顔を伏せ、激しい悲しみに身を任せましたのです。

しばらくして、彼女は少しずつ気持ちを取り戻しました。そして、途切れ途切れに、自分が、ようやく死を越えたのだということに気づいたばかりなのだと話し始めました。

そして、それと同時に、霊の世界での生活が、自分が想像していたものとも、信じていたものとも、まったく違っているという衝撃的な事実を知ったのです。

さらに、すでに経験から学んだことや、自分より成長した霊たちに尋ねて教えてもらったことから、彼女は、自分がその世界で生きていくための備えを、ほとんど何も持っていなかったことに気づきました。

彼女は、自分が成長していくために必要な性質を、

ほとんど持っていないことを知ったのです。

彼女は、自分がまったく独りであり、厳しい現実の世界に向き合っていることを知りました。そこでは、誰もが、自分の霊的な性質や、どの程度成長しているかを、外に放っている色によって、誰にでも見える形で示しているのです。

さらに彼女を苦しめたのは、生前の友人たちが、みな偽りだったとわかったことでした。

彼女のあとを追って来た優しい思いは、誰からもありませんでした。そして彼女は、その悲しい状態になった原因の一部は、そうした友人たちにもあるのだと、苦々しく思っていました。

「私は、みんなが嫌いよ！」

彼女はそう叫びました。彼女にはたくさんの友人がいて、とても人気者だったのです。

「みんな、嘘ばかりの、お世辞ばかり言って、私を間違ったほうへ導いたのよ。」

私は、彼女を助けるために、何を言えばよいのかわかりませんでした。そして思わず、こう言いました。

「でも W、あなたのお母さんがどれほどあなたを愛していて、どれほどあなたのことですべて悲しんでいるか、あなたは知っているでしょう？」

「ええ」と彼女は疲れ切ったように答えました。「母のせいではないわ。」

「でも——ほかの人たちは？」

そう言うと、彼女は再び、前と同じ沈黙と暗い気持ちの中へ戻ってしまいました。

彼女からそれ以上の返事はありませんでしたが、私は話し続け、できる限り助言をしました。

私は、自分自身を正し、勉強し、一生懸命努力すれば、自分を成長させることができるのだと話しました。そして、そうすれば、いつかはきっと成功し、幸福になれるのだと伝えました。

しかし、私の助言は、あまり役に立たなかったようでした。

それでも彼女は、私が示した同情によって、少しは慰められたようでした——それが本物の思いやりだと、彼女にはわかっていたのです。

彼女は長椅子から立ち上がり、私の肩に頭をもたせかけました。私は彼女を支えるように、腰に腕を回しました。

そうして私たちは、ゆっくりと階段を下り、家を出ました。

やがて私たちは別れました。しかし彼女は、私が最初に見つけたときと同じように、なおも深く落ち込んでいるようでした。

ある霊たちが、どれほど長いあいだ地上にとどまっているかということは、次の、やや滑稽な出来事によって、はっきりと私に示されました。

私はニューヨーク市に滞在していました。そしてある夜、ちょうど眠ろうとしていたとき、私は奇妙な感覚に気づきました。

誰かが私の髪に指を触れているように思えたのです。あるいは、弱い電流を出している電気器具を、頭の上であちこち動かしているような感じでした。

私はすぐに、肉体を離れる直前にいつも起こる状態に入り、たちまち、自分の肉体のそばの床に立っていました。

すると、私を非常に驚かせる光景が目に入りました。部屋じゅうが、インディアンの霊でいっぱいになっていたのです。彼らはみな、二百年から三百年ほど前の、昔ながらの服装をしていました。

彼らは、自分たちのいつもの習慣どおり、私の頭皮を剥こうとしていたのです。

しかし今や、私はアストラルの世界にいて、彼らと同じ立場にありました。そこで私は、霊としての自分のほうが彼らより高い力を持っていることを利用し、すぐに部屋から出て行くよう命じました。

すると彼らは、たちまち従いました。

彼らは大騒ぎしながら、部屋から、さらに建物から、転げるように飛び出していきました。激しく身振りをしながら、「白人」に向かって怒鳴り、悪態をついていたのです。

彼らは、自分たちの言葉で、とても早口に話していました。その声は、何か異変に驚いて騒ぎ立てているガチョウの群れのようなようでした。

彼らは自分たちの言語で話していましたが、私はその内容を完全に理解することができました。なぜ

なら、ひとたびアストラルの世界へ入ると、人はあらゆる言葉がわかるようになるからです。

地上で話されているどんな言語でも、完全に理解できるのです。

あのインディアンたちが、いったいどこへ行くのか知りたくなり、私は彼らの後を追いました。

彼らは町の中心部へ向かいました。そして、現在「にぎやかな四十番街界限」と呼ばれている地域の真ん中へ入って行ったのです。

彼らは、そこにある劇場のひとつの地下室へ、みな入って行きました。

私もその場所へ入ってみました。

そこは、その霊たちでいっぱいでした。彼らは床にしゃがみ込んだり、横になったり、立ち上がったたりしながら、みな興奮して、戦いの相談のようなものに加わっていました。

その劇場の地下室、男たちの喫煙室の壁には、インディアンたちと、マンハッタンに最初に住み着いた白人たちとが、互いに相談し、取引している場面が描かれていました。

私は後になって、その劇場の場所が、昔、あるインディアンの部族が野営していた場所だったことを知りました。

このインディアンたちの霊は、ほとんど三百年ものあいだ地上をさまよっていました。そして、今でもなお、自分たちはまだ地上に生きていて、白人にひどい扱いを受けているのだと思い込んでいたので

す。

彼らの会話から、私はそう理解しました。

彼らは、「青白い顔の人間」が、自分たちからマンハッタンをすべて奪ってしまったことに怒っていました。

怒りに狂った彼らは、誰かの頭皮を剥ぐために、たびたび出かけていたのです。

ですから、もしこの劇場に来る客たちの中に、感受性の強い人がいて、髪あたりに妙な感覚を覚えることがあるなら、その理由はこれでわかるでしょう。

さて、次に、私が地上をアストラルの身体で歩き回っているときに経験した、もっとも奇妙な出来事の

ひとつについて話しましょう。

最近の大統領のひとりが亡くなりました。

その死と葬儀に関するあらゆるニュースに、国じゅうが特別な関心を寄せていました。

それを見て、私は、その大統領が霊の身体の中でどのように感じているのか、強く知りたくなりました。

そこで、次に私が肉体を離れる機会が来ると、私はまっすぐホワイトハウスへ向かいました。

私は、亡くなったばかりの大統領の霊に、すぐに会えるものと思っていました。

ところが驚いたことに、私が出会ったのは、百年以

上前にこの世を去った大統領の霊だったのです。

彼は、この国の初期の大統領のひとりでした。

彼は、堂々とした、貴族のような風貌をしていました。そして、彼が生きていた時代の最先端の流行そのままに、非常に念入りに身なりを整えていました。膝までのズボンに、絹の靴下、そして留め金のついた靴を履いていました。

刺繍のほどこされた豪華なチョッキは、上着の襟から垂れ下がる繊細なレースの飾りによって、半ば隠れていました。

彼は大きな椅子に座り、足を組み、自分の前に座っている妻と話していました。

妻もまた、当時の流行の最先端そのままの服装を

していました。

蜂のように細い腰からは、長く広がったスカートが垂れ、ぴったりと身体に合った胴着を身につけていました。

髪は高く結い上げられていました。

その人の動きには、どれも、貴族らしい優雅さと上品さがあふれていました。

私とその部屋を通り抜けたとき、その老大統領は、冷たく高慢な目で私を見ました。その視線には、迷惑そうな気持ちと、好奇心とが入り混じっていました。まるで、私が勝手に入ってきたことを不愉快に思い、何のために来たのかを疑っているようでした。

しかし、老大統領とその妻は、すぐに私の存在を無視するようになりました。というのも、さらに別の霊が部屋へ入ってきたからです。

それは、最近亡くなったばかりの大統領の霊でした。

彼は、まったく呆然としているように見えました。

そのぼんやりした様子から、私は、彼が自分に何が起こったのかを、まったく理解していないことを感じ取りました。

彼は、考えることも、はっきり判断することもできないようでした。

彼は、自分の置かれている状況を理解しようとして、一生懸命に考えをまとめようとしているようで

した。

なぜ、見知らぬ訪問者が、自分の許しもなくここに
いるのか、彼には理解できなかったのです。

しかし、その張りつめた空気は長くは続きませんで
した。

老大統領が、ゆっくりと立ち上がったからです。

彼は数歩進み、威厳ある態度を取りながら、新しく
来た大統領の真正面に立ちました。

そして、何の遠慮もなく、こう言ったのです。

「さて、私はあなたに、ここを出て行けとまでは言
いません。あなたは、自分がどういう状態にあるかを
理解するまで、ここにいてもよい。しかし、それがわ

かったなら、出て行かねばなりません。」

しかし、この老大統領のぶっきらぼうな挨拶も、新しく来た霊を怒らせることはありませんでした。おそらく彼は、自分のまわりで何が起きているのかを、はっきり理解できなかったのでしょう。

その霊が部屋を出て行ったあと、老大統領は、いかにも見下すような口調で私にこう打ち明けました。

「私は、あの霊が好きではない。そして、彼が国を治めていたやり方も、私はずっと気に入らなかった。」

そう言うと、彼は向きを変え、部屋を出て行きました。

私は、状況をすぐに理解しました。

この夫婦の霊は、長いあいだホワイトハウスに縛りつけられていたのです。そして、そこで生前に味わった権力と栄光への思いに、今もなお心を強く結びつけているために、自分たちの成長を妨げていたのでした。

彼らは、あの有名な場所で過去に起こったこと、そして今なお起こっていることのすべてを、嫉妬深く見守っていたのです。

彼らが、もっと理想的な生き方についての考えを持つようになるまでは、彼らはこの古い、限られた場所にとどまり続けるでしょう。

しかし、彼らは何か大きな悪事や、意地の悪い罪を犯したわけではありませんでした。

彼らが地上に縛られていたのは、ただ、その理想が低かったからなのです。

私は、死んで間もない霊たちと交わした会話について、まだまだ多くの話を語ることができます。

しかし、私はもう十分に、読者に、彼らの心の状態、理想、そして行動について、はっきりとしたイメージを与える材料を示したと思います。彼らは、新しい生活の最初の段階にいる霊たちなのです。

すでに読者が見てきたように、霊たちが、霊の世界へ引き寄せられる前に、地上にとどまっている時間は、人によって大きく違います。

彼らはみな、最後に地上を離れる前に、昔いた場所のまわりを漂っています。

豊かな靈的資質を持ち、高く成長している者にとっては、さらに高い境地へ移るまでの期間は短いものです。

それほど成長していない者たちは、昔の生活への関心に、もっと強く縛られています。

しかし、大多数の霊たちは、自分に何か変化が起こったことに気づいていないため、長いあいだ地上に縛られたままです。

中には、何かが変わったのではないかと、ぼんやり感じている者もいます。しかし、過去への愛着が強いために、その事実を認めようとしません。

また、霊の世界へ行ったあと、さらに長い時間を地上で過ごすために戻って来る者も大勢います。彼

らは、霊の世界で何の成長もできなかったからです。

さらに、多くの悪い霊も、地上へ戻って来ます。彼らは、ここなら、自分たちの悪意ある行いを、もっと広く行うことができるからです。

そうした悪い霊たちは、多かれ少なかれ、地上に住み続ける者となります。

しかし、その熱心な悪霊たちの悪い働きに対抗して、非常に高度に成長した霊たちの大きな集団があります。彼らは、あわれみの仕事のために、絶えず霊の世界と地上とのあいだを行き来しています。

これらの霊たちは、善なる者たちの軍勢なのです。

善い霊と悪い霊とは、絶えず戦っており、それぞれ

が人類を支配しようとして争っています。

このようにして、地上にいる霊の数は、生きている人間の数よりも多く、その生活もまた、あらゆる国や性質のものが入り混じった、きわめて多様なものなのです。

霊たちが地上を離れたあとに向かう場所は、発達
の程度に応じて順に並んでいる、大きな世界です。

それぞれの世界は、非常に広大な、ひとつの独立した世界になっています。

そのような世界が、実際にはいくつ存在するのか、私は知りません。私は第四の世界より先へは行ったことがないからです。

霊たちは、最終的には、まず第一の世界へ引き寄

せられていきます。

私にわかる限り、その第一の世界は、私たちの太陽系のすぐ近くにあります。

私がそれらの世界や宇宙を旅するときには、案内役が必要でした。

私が肉体を離れ、その旅に出る準備をすると、必ず、同じひとりの案内役が私のそばに現れました。

その霊の案内役が、なぜ私に関心を持っているのか、あるいは、どのような法則によって私を導いているのか、私にはわかりません。

しかし、彼はいつも私の右側にいて、私の進む道を示してくれます。そして、私たちが訪れる世界についての知識も、彼から得るのです。

彼は、私がいつ肉体へ戻るべきかを、注意深く決めてくれます。肉体を離れている時間が長すぎると、戻ることが不可能になり、肉体が死んでしまう危険があるからです。

まるで、不思議な力の流れが、アストラルの身体と肉体とを結びつけているようなのです。そして、その流れは、肉体から離れている時間が長くなるにつれて、しだいに弱くなっていきます。

私の案内役は、非常に堂々とした人物です。背が高く、均整のとれた身体をしています。

彼は、古代ローマの貴族たちの服装に少し似た、足元まで届く長い衣を身につけています。

彼には、大きな権威を感じさせる雰囲気があり、ど

こへ行っても、その権威は認められていました。

彼は、キャロラインを縮めて、私を「カロロ」と呼びます。

「第一の霊の世界」

私が最初に訪れたのは、霊たちが地上を離れてすぐに到着する世界ではなく、もっと高い生き方と成長の段階にある世界でした。

そこで私が見たものによって、私は第一の世界を見たいと願うようになりました。そして、これまでお話ししたように、実際には私が先に見た第三、第四の世界の輝きを描写する前に、この第一の世界をまず説明するのが最もよいように思われます。

第一の世界は、私たちのこの世の生活から解放されたばかりの者たちのいる場所であり、そこで彼らは、より高い世界へ進む道を学ぶことができます。またそこは、地上に心を縛られた魂たちのいる場所でもあり、その中には、どう見てもそれ以上先へ進むことがないように思われる者たちもいまし

た。

私が第四の世界を去ろうとしていたとき、私は第一の世界へ連れて行ってほしいと願いました。

それまでに私が見たもの——霊たちの生活、その周囲の驚くべき美しさ、彼らの関係を支配している愛、彼らの威厳、優雅さ、そして静けさ——そのすべてが私を圧倒していました。

喜びの叫びが私の唇までこみ上げましたが、こうした栄光を知らない者たちへの突然の憐れみの思いが、それを押しとどめました。

「ここへ入ることのできない霊たちは、どこにいますか」と私は尋ねました。「悪い霊たちは、どこに住んでいるのですか。そして、霊たちは最初にどこへ来るのですか」

私の案内役は答えました。

「あなたは、それを見ることになるでしょう。」

次の瞬間、私たちは宇宙を、果てしない暗い空間を
通って、ものすごい速さで進んでいました。

「大きな隔たりが定められている」という言葉が、私の心に浮かびました。

しかし、ひと言も交わされませんでした。

やがて遠くに光が現れ、間もなく私たちは、ひとつの世界へ足を踏み入れました。それは、私が今しがた離れてきた世界に比べれば暗く、鈍い世界でしたが、開けた田舎があり、通りや建物のある町があり、見慣れた道筋に沿って生活が営まれていると

いう点では、私たちの住むこの世界とよく似ていました。

この似かたは、そこへ来たばかりの霊たちの多くが、自分が死という変化を経験したことをまだ知らず、空しい行いが失敗し続けることで思い違いを捨てるまで、以前の習慣どおりの生活を続けようとするためだと、私は教えられました。

最初のうちは、そこにあるすべてが、この思い違いをいっそう強めるように働いています。

光さえも、地上よりは明るいものの、その幻想を打ち破るほどには明るくないのです。

私は、巨大な都市の中にいました。その通りは、どこまでも続いているように見える建物の列の間を伸びており、ところどころで大きな広場へとつなが

っていました。

人の流れは、地上のどの都市よりも密でした。

霊たちの群れが、四方八方へと急いで通り過ぎていきました。

私が立っていた場所の前を、無数の霊が次から次へと押し寄せて通っていきました。

彼らは、私が知ったところによれば、新しく来た者たちでした。

彼らは私には、混乱し、落ち着きを失い、果てしなく何かを探し求めているように見えました。

その顔には、当惑、動揺、そしてはっきりしない願いが読み取れました。まるで、自分でもよくわから

ない目的地を目ざして進んでいるようでした。

彼らの大半は、自分がすでにこの地上を離れたことにまだ気づいておらず、なぜ突然、見知らぬ者たちに囲まれ、地上のどの都市とも似ていながら、しかもどこかそれ以上に奇妙な都市にいるのかを知ろうとしていたのです。

困惑した驚き、不思議さ、苦しみ、信じられない思い、そして次第に芽生えてくる不安が、その通り過ぎる顔々に現れていました。

自分の状態を理解しているか、あるいは疑い始めている少数の者たちは、ただそれを確かめ、自分の行くべき場所——まだ自分では知らないその場所——へ到達しようとしていました。

彼らは皆、地上にいたときと同じ服装をしていまし

た。というのも、アストラルの身体から放たれるオーラが、霊の心によって形を与えられ、地上で着慣れていた衣服の姿を霊にまとわせるからであり、こうした新しく来た霊たちは、なお完全に以前の生活の理想に支配されていたからです。

そのため、地上と同じような服を着て、地上と同じ目的に動かされている無数の存在が、地上の都市と同じように、あらゆる種類と目的の家々が並ぶ通りを押し合うように進んでいました。

その押し寄せる群衆の動きも、また地上的でした。

新しく来た多くの霊たちは、以前と同じように自分の生活を続けたいという願いを示しています。

霊たちの大半は、繰り返し味わう失望によるのみ、自分がもはや地上にはいないのだということ

悟るようになります。その失望が、地上の物事に置いていた価値観を少しずつ打ち壊していくのです。

このようにして、この第一の世界は、新しく来た者たちのための一種の整理の場のように なっています。

地上ですでに高く霊的に成長していた者たちは、ほとんど直接に、より高い世界へ進みます。

それほど高くは成長していないものの、前進したいと強く願っている者たちは、自ら進んで助け手の役目を選んだ、より高い世界の霊たちの導きのもとで、厳しい訓練を受け、前進の準備をします。

そして最後に、ここに長くとどまり、おそらくは永遠にとどまる者たちがいます。

それが、地上に心を縛られた魂たちです——その心が、地上の欲望や影響にしか開かれておらず、靈的に成長したいという願いをまったく持たない者たちです。また、コーマスの中のある女性の言葉で言い表すのがふさわしい者たちもいます。「おまえは、自分が説き伏せられるのを聞くに値しない！」

この第一の世界にいる異なる種類の霊たちは、それぞれ別々の場所で暮らしており、助け手の霊たちは、どの種類の霊も他の種類に交じって、その妨げにならないように見守っています。

こうした助け手の霊たちは、どこにでも見られ、すぐに見分けることができます。彼らのオーラが、白い光の球のように彼らを包み込んでおり、それが彼らの高い靈的狀態を示しているからです。

彼らは威厳がありながらも、思いやりに満ちた姿を

していて、その顔には霊としての性質が表れています。

彼らは皆、足元まで届く長い白い衣を身につけています。

男性はたいていチュニックのような衣を着ており、女性は、簡素でありながら非常に女性らしい服を着ていて、頭を覆う布が背中を流れて下まで垂れています。

これらの助け手たちの務めは、実にさまざまです。

彼らは、教えを授けることであれ、力や励ましや同情を与えることであれ、あるいはその心を満たしている純粋な霊的愛から生まれるあらゆる行いをなすことであれ、常に助ける用意ができています。

助けや援助を求める声で、彼らに聞き届けられないものはひとつもありません。

しかし同時に、彼らの助けも働きも、誰かに無理に押しつけられることはありません。

あの世界でも、この世界と同じように、誰もが自由に自分の運命を切り開くように委ねられています。

助けを受ける前に、求める者は、私たちが地上でよく知っている意味での、心からの向上への願いを持っていなければなりません。

自己を治めること、真実、正義、そして何よりも純粹な靈的愛——それらこそが、より高い世界の生活を支えている人格の性質なのです。

ここでそれらの性質を得ることは、あちらでも得る

ことになります。

ただの知性や教養や知識は、それだけではあちらでは何の価値もありません。ただし、それらのより高い美德に力を与え、それをいっそう有効なものへと進め、高い責任、奉仕、権威という実りへ成熟させる場合は別です。

新しく来た霊たちは、より高い霊の世界の崇高な生活へ進みたいと願うなら、そのために自分の努力を向け、自らを整えなければなりません。そのうえで初めて、彼らはその道を示され、助けを受けることができるのです。

第一の世界に住んでいる霊たちのかなり多くは、懸命で真剣な努力によって、自分をより高い段階へ引き上げようとしている者たちです。彼らは、より進んだ霊的状态に広く行きわたっている考え方を

身につけ、新しく形づくられた理想に従おうと努めています。

しかしその一方で、そのように自分を向上させたいという望みを持たず、そもそも向上とは何を意味するのかさえ理解していない者たちも、大勢います。

地上にいたころ、そうした霊たちは、霊的なものについての見通しを持たず、物質的な楽しみや、世間的な成功、あるいは卑しい欲望に、完全に心を奪われていました。

人生のうちでも、せいぜい一時的な価値しか持たないような事柄が、彼らの努力のすべてを占めていたのです。

魂の目は今もなお閉ざされたままであり、彼らはただ、地上での関心や喜びを、もう一度生きようとす

るだけです。

そして、欲望が悪に向いていた者たちは、自分たちの誤った基準へ、他の者たち——霊たちも、まだこの世界にいる人々も——を引き込もうとします。

彼らにとって、人生は前進するものではなく、ただ空しく繰り返されるだけなのです。

こうした地上に縛られた魂たちの中には、自殺した者たちもいます。

彼らは、その罪の性質からして、地上での苦しい生活が、ほかのすべてを飲み込み、ついには暗い絶望が、霊的な光の最後の一筋までも断ち切ってしまった人々だったに違いありません。

彼らは、その同じ心の状態を、この世界へ持って来

ます。そして、より高い慰めに対して耳も目も閉ざしたまま、かつて極度の絶望に襲われたその場所へ戻り、再び、自ら命を絶った恐怖を味わおうとするのです。

殺人や、その他の恐ろしい暴力の罪を犯した者たちにも、同じ報いが訪れます。

地上に縛られた魂たちは、自分自身が作り上げた世界を、そのまま持って来るからです。

これが、この世界にずっと住み続けている者たちの姿です。

私は、この世界での生活の細かな様子を、自分自身で見たいと思い、地上に縛られた魂たちの住んでいる場所を訪ねました。

彼らの生活と、前進している霊たちの生活との違いは、驚くほどはっきりしていました。

地上に縛られた霊たちの顔には、その悪い情熱や欲望、低い目的や地上的な願いが、そのまま表れています。

彼らのオーラは、非常に暗い色をしています。それは、前進している霊たちのオーラと、はっきり対照的でした。前進している霊たちの間では、白、クリーム色、桃色、淡い青、その他の明るい色が多く見られるのです。

霊がより明るくなるにつれて、その変化は、オーラの輝きの増加として表れてくるのです。

しかし、地上に縛られた霊たちの間では、暗いオーラと、暗い色の服しか見られません。そしてその服

は、いつも地上で着ていた流行のままです。ちょうどその顔が、地上での欲望や弱さを、今もはっきり刻みつけているのと同じです。

彼らの顔にかかっている暗い影は、彼らが行った悪事による絶望と悪意で、重く満たされているように見えました。

私はある家に入りました。すると、部屋から部屋へと、まっすぐに、果てしなく続いているようでした。

それぞれの部屋は、地上でかつていた場所を探しに行っていないときの、霊たちの住まいでした。

そこに住んでいる者たちの多くは、奇妙で恐ろしい姿をしていました。

ある部屋には、太って醜い姿の女が座ってしまし

た。彼女は地上では売春宿を経営していました。

彼女は、多くの不幸な若い娘たちの身体と魂を、破滅させてきたのです。

そして今、霊の世界に来てなお、彼女の唯一の恐ろしい願いは、以前の恥ずべき仕事を続けることでした。

彼女は今でも、若い娘たちを悪い道へ引き込み、墮落した生活へ導くことができました。あるいは、娘たちに取り憑き、彼女たちを破滅へ追いやることもできたのです。

私が通りかかると、彼女は鏡の前に座り、顔に化粧をしているようでした。

彼女は、地上での職業そのままの派手な服や装飾

品を身につけており、その顔には、下品で意地の悪い表情が浮かんでいました。

彼女は私に、憎しみに満ちた目を向けました。まるで、「おまえは誰だ。ここで何をしている」と言っているようでした。

それから彼女は、失礼そうに顔をそむけ、再び化粧を続けました。

私は身震いしながら、その場を急いで離れ、別の部屋へ向かいました。そこには、哀れな者、嫌悪を感じさせる者、恐ろしい者など、さまざまな種類の住人がいました。

ある部屋では、一人の婦人が、ゆっくりと考え込むように部屋の中を歩き回っていました。

その堂々とした姿、その貴族的で洗練された様子が、私の注意を引きつけて離しませんでした。

彼女は、十九世紀半ばごろの流行の婦人のような服装をしていて、背が高く、その顔には、地上ではたいへん美しい人であったことがはっきり表れていました。

彼女の人柄は、私の心に、すぐに強い同情を呼び起こしました。私は思わず叫びました。

「どうして、この人がここにいるのですか」

「本人に尋ねてごらんなさい」と、私の案内役は言いました。

私は彼女に近づき、「どうして、あなたはここにいるのですか」と尋ねました。

すると彼女は、優雅なしぐさをしながら、後悔をに
じませつつも、どこか諦めたように答えました。

「これらを置いて、どうして行けたのでしょうか」

私は、彼女が指さしたほうを見下ろしました。すると
驚いたことに、そこには、まばゆく輝く宝石の見事
なコレクションがあり、彼女はそれをじっと見つめ
ていたのです。

私は理解しました。

彼女が地上で持っていた宝石は、今もなお、彼女
の魂を支配していたのです。

それは、地上にいたときと同じように、今も彼女を
とらえ、彼女だけが断ち切ることのできる鎖で、彼

女を地上につなぎ止めていたのです。

だからこそ、彼女は地上に縛られた魂たちの中に
住んでいたのです。

私は彼女を同情を込めて見つめ、その場を去りま
した。

そのような霊たちが待っているのは、落胆と不幸の
生活だけです。

彼らは、自分で自分の状態を作り上げてしまった
のです。そして、自分たちの理想が無価値であるこ
とを悟り、そこから抜け出したいと心から願うこと
だけが、彼らを、もっと明るい生活へ解放すること
ができます。

しかし、地上に縛られた魂たちの中では、そうした

願いがまったく存在しないことも少なくありません。
多くの者が、完全に悪への欲望に支配されている
からです。

私は、そのような者たちに何人も出会いました。

その中の一人は、特に私の注意を引きました。とい
うのも、彼は、この種の霊の中でも、異常なほど恐
ろしい見本だったからです。

悪そのものが、彼の姿を実際に変形させてしまった
ようでした。

彼の顔は、つり合いが崩れていました。縦の長さに
比べて、横に広すぎたのです。

鼻と呼べるようなものはほとんどなく、口は耳から
耳まで裂けるように広がっていました。

異常に大きな耳は、顎の下まで垂れ下がっていました。

ひどく平たい額の下には、大きな二つの目がありました。その目は、鼻よりもこめかみの近くにあり、悪魔のような悪意に満ちて輝いていました。その視線は、私の霊そのものを凍りつかせるほどでした。

彼の顔には、悪、卑しい欲望、そして容赦のない憎しみしか現れていませんでした。

私は、身を守るために、案内役にしがみつきました。

その醜くゆがんだ霊の腕は、奇怪な身体からだらりと垂れ下がっていました。

節くれ立った荒々しい指は、鷲の爪のようでした。

その霊の色は、暗い茶色でした。それは霊の世界では、もっとも望ましくない色です。なぜなら、それは存在の状態がもっとも低いことを示しているからです。

同じ暗い茶色の衣は、手首のところで広がっていて、彼が腕を持ち上げると、まるで巨大なコウモリのように見えました。

私の案内役は、そのような霊は、自分が地上でふけていたのと同じような罪と悪の生活へ、人間たちを引き込もうとして、ほとんどの時間を地上で過ごしているのだと説明しました。

このような霊たちこそ、悪霊の軍勢です。彼らの唯一の仕事は、人間たちを低い欲望へ誘い、その心

を支配して、悪事のために利用することです。

彼らは悪の軍勢であり、その中では、善を愛する心は衰えきってしまい、霊の高いものに触れると、それが自分の性質にとって命取りになるもののように感じて、身を引いてしまうのです。

この状態から変わることは、たしかに非常に困難です。

しかし、不可能ではありません。なぜなら、あちらでも、この世界と同じように、誰もが自分の運命を自分で切り開くように委ねられているからです。

変化の種は、その人自身の中にあります。

それを育てることができるのは、その人自身だけなのです。

しかし、そのような魂が善から遠く離れてしまえば
しまうほど、そこへ戻ることは難しくなります。

どんな悪い行いも、その償いを必要とします。そし
て、そのつり合いは、魂の中で取られなければなら
ないのです。

この意味においてのみ、天国と地獄が存在します。

「私たちが何であるか——それこそが、私たちの行
き着く先なのです！」

それでも、変わりたいという、ほんのかすかなため
息できえ聞き届けられ、導きが与えられるのです。

地上に縛られた魂たちのいる場所を通っていると
き、私は、さらにいっそう哀れで悲惨な光景に出会

いました。それは、もしできることなら、私の記憶から消し去ってしまいたいほどのものでした。

ひとりの女性の助け手の霊が私に近づき、黙って、ついて来るように合図しました。

私は彼女の持つ権威を感じ取り、その後について行きました。私たちは、人の多く住む場所と、何もな
い空いた場所とが交互に続くところを進んで行き
ました。

歩きながら私は、黙って彼女を見つめていました。
私たちのあいだには、一言も交わされませんでした。
彼女は、自分の考えに深く沈んでいるように見え
ました。

彼女の流れるような衣は、輝くような白でした。頭
を覆う布は、優雅に背中へ垂れ下がっていました。

そして両手は胸の上に置かれていました。

その姿も顔も非常に美しく、明るい白いオーラが、光のように彼女を包んでいました。

しかし、私が何よりも強く感じたのは、彼女の霊としての性質でした。

純粹さ、愛、同情が、花から香りが漂うように、彼女から自然にあふれ出ているように思えました。

また、知性の強さと高い権威が、彼女に威厳を与えていました。

私は、この案内役の女性への感嘆と、彼女が私をどこへ連れて行こうとしているのかという思いとのあいだで、心が揺れていました。

やがて私たちの旅は、驚くほど巨大な囲いの前にある、大きな門のところで終わりました。

門の前には、背の高い、黙ったまま動かない人物が立っていました。どう見ても見張り役でした。

その表情は厳しく、感情をまったく見せませんでした。そして、そのことが、その場所全体に漂っている荒れ果てた雰囲気をも、さらに強くしていました。

私に、その場にとどまる勇気を与えてくれたのは、ただ案内役の女性がそばにいたことだけでした。

彼女が命じると、二つの重そうな門は、ゆっくりと開き、そして私たちが中へ入ると、同じようにゆっくりと後ろで閉じました。

そこで私が見たものは、奇妙であり、しかも非常に

気持ちを沈ませる、恐ろしいものでした。

その広大な囲いは、拘置所であり、病院であり、更生施設でもありました。そこにいるのは、地上で薬物や酒を使ったために、あるいは悪い欲望にふけたために、心が曇ったり、壊れてしまったりしたまま、この世界へ来た霊たちでした。

ここでは、彼らの心は、そしてしばしばアストラルの身体までもが、地上にいたときと同じように傷ついたままでした。

長椅子の上や床の上、あるいは隅にうずくまるようにして、そうした壊れてしまった人間たちが、横たわったり、しゃがみこんだりしていました。彼らは霊としての目が閉ざされ、手足は縮み、しばしばまったく衣服もなく、その目には、ぼんやりした無感覚か、鈍く重い絶望だけが浮かんでいました。

死、荒廃、絶望の空気が、私の心を苦しみにいっぱいにしていました。

案内役の女性は、突然立ち止まりました。

私たちの前には、長椅子の上に、ねじれ、ゆがんだ姿が横たわっていました。

その動かない沈黙は、恐ろしいものでした。顔はひどくゆがみ、手足は、ばらばらに積み重なったようになっています。

しかし私は、恐ろしい思いで、その顔を見覚えめました。それは、かつて私の人生に深く関わっていた人の顔だったのです。

私は助け手の女性を見ました。

なぜ彼女は、こんなにも苦しい思い出を呼び起こすこの男を、私に見せたのだろう——そう思いました。

助け手の真剣な目が、私の目を見つめました。

「あなたには、この人を助けることができませんか」と彼女は言いました。

「あなたは、地上で、この人と深い関わりを持っていたでしょう。」

というのも、高く成長した霊であっても、地上に縛られた魂を助けるためには、同情と愛が必要だからです。

「ええ」と私は言いました。「私は以前、この霊と深

い関わりを持っていました。でも、もうそうではありません。」

それでも、少しでも助けになる可能性を見捨てないために、私は、自分の嫌悪感をなんとか抑え、その人の頭に三度触れ、昔なじみの名前呼びました。

しかし、それは何の役にも立ちませんでした。

彼は、ぼんやりとした無感覚の中に沈んだままでした。すると助け手は、悲しそうに言いました。

「残念ですが、あなたには何もできないでしょう。」

彼女は、私が失敗した理由を、よく知っていたのです。

というのも、私は地上にいたころ、この人に対して強い嫌悪を抱いており、その反感を、まだ捨て去ることができずにいたからです。

そのため、私たちのあいだには、つながることのできるものが何もありませんでした。なぜなら、同情と愛こそが、霊的な助けの第一歩だからです。

助け手は、再び私に、ついて来るよう合図しました。そして私たちは、ゆっくりと門のほうへ向かって歩きました。

そのとき私は、ひとりの若い男の姿に目をとめました。見たところ、ラテン系の人でした。彼は、壁にもたれかかるように、半ば座った姿勢で横になっていました。

その顔には、彼が経験してきた恐ろしい苦しみ、そ

して今なお経験している苦しみが、はっきりと表れていました。

彼の目は、左右へ落ち着きなく動いていました。その目には、人をあざ笑うような、悪意を含んだ恨みの表情がありました。しかし、その奥には、隠しようのない絶望がありました。

彼はきっと、長いあいだ、ここへ入って来る人たちを見つめ続け、誰かが助けてくれるのではないかと期待していたのでしょう。

そして今、その助けを求める視線が、私へ向けられていました。

しかし、つい先ほどの経験から、私には、彼を助けることはできないとわかっていました。

私は外へ出ようとしながら、振り返って、もう一度その胸をえぐるような光景を見渡しました。そして、悲しみながら、あるいは少し抗議するような調子で、こう言いました。

「でも、どうして、この人たちはみな、ここにいるのですか。誰が彼らを、こんな恐ろしい場所へ連れて来たのですか。」

「誰でもありません。ただ、彼ら自身です」と、助け手は重々しく答えました。

「彼ら自身の行いが、彼らをここへ置いたのです。」

私は、それ以上は何も尋ねませんでした。そして、黙って助け手の後について行きました。

私は今や、高く成長した霊たちの住む場所——彼

らは、より高い世界へ導かれるのを待っているだけで
でした——も、さらに霊的に成長しようと真剣に努
力している者たちの、にぎやかな住まいも、そして
地上に縛られた魂たちの、重苦しい世界も、後にし
ていました。

そして今度は、まったく違う種類の人々が住んでい
る場所へ来たのです。

ここに住んでいるのは、地上の物質的なものには
縛られていないものの、霊的には、まだごく初歩の
段階にいる者たちでした。

地上にいたとき、こうした人々は、きちんとした、信
用できる、そして親切な人たちでした。

悪は、彼らを誘惑しませんでした。

彼らは、世の中の恵まれた人々の、心地よい生活を送っていました。

もし彼らが自分の霊的な生活について考えることがあったとしても、それは、自分たちに満足する形ででした。なぜなら、自分たちは立派な市民であり、よい隣人であると思っていたからです。

しかし全体としては、彼らは霊的なことには、ほとんど注意を向けませんでした。

たしかに彼らは、目に見えず、知られていないものを、目に見える、よく知っているものよりも大切にすることはありませんでした。

彼らの魂は、季節がめぐっても、耕されない畑のようなものでした。

そこには、有害な雑草は生えませんでした。しかし同時に、魂の黄金の麦も実ることはなかったのです。

そのため、今や無限の可能性が目の前に開かれている世界にいるにもかかわらず、彼らの進歩は遅いのです。

彼らは、地上にいたときと同じように、心地よい家と、美しい庭のある場所で暮らしています。そのまわりの様子は、驚くほど地上のものに似ています。

彼らは、友人たちとつながりを保ち、礼儀正しく、近所づきあいをしています。服装も地上にいたころと同じです。そして、彼らのオーラは、地上に縛られた魂たちとはまったく対照的に、明るく陽気な色をしています。

しかし彼らは、地上で作り上げた望みや、穏やかで、特別な勇気を必要としない、気楽な善良さの生活に満足しています。そして、上へ向かう道には必ずある霊的な戦いを、ほとんど意識していません。

時には、互いに気が合うために、三人、四人、あるいはそれ以上の人数で一緒に暮らしています。

しかし、もっと多いのは、男性が女性に惹かれる場合で、それは、この地上での関係と少し似ています。ただし、あちらでは、その結びつきは純粹に霊的なものです。

ここで私は、自分の叔母と、いとこに会いました。

地上では、この叔母は、私のいとこ——裕福な銀行家で、叔母と同じく独身でした——の家を、長いあいだ取り仕切っていました。

二人は長年、仲よく暮らしており、そのため、お互いに自然で気楽に接する関係になっていました。

そのため、霊の世界でも、私は再び二人が満足そうに一緒に暮らし、できるかぎり、地上での生活の細かな様子を再現しているのを見つけたのです。

彼らが属していた上流階級らしい、穏やかな優越感さえも、新しい生活の中に再び現れていました。その狭い人間的な同情心、まったく非の打ちどころのない立派さ、そして正しさまでもが、そのままでした。

これほど変化を拒む空気は、ほかにはないでしょう。そして、そのために、彼らの成長は遅いものでした。もっとも、叔母のほうは、いところよりは、いくらか先へ進んでいることがはっきりわかりました。

いとは私に気づき、私がどういう事情で霊の世界を訪れているのかも知っているようでした。そして、私をそばへ引き寄せて、こう言いました。

「キャロライン、きみは、よくやっている。」

「ハーリグ叔母さんは、どこにいるの」と私は尋ねました。

「慈悲の仕事に出かけている。叔母さんは、よくそのために出かけるんだ」と、彼は答えました。

どうやら叔母は、正しい道へ足を踏み出せるだけの成長を、すでにしていたのです。

ここで私は、最近になって霊の世界へ来た、私の友人だったひとりの少女にも会いました。

彼女は私に気づき、私に会えたことを喜んでいるようでした。

彼女と話していると、彼女は、自分がどのような状態にいるのかについて、ぼんやりとしか理解していないように感じられました。

彼女は、地上から来た友人や知人たちの集まりに加わっていました。その人たちは皆、同じ町に住み、同じ教会へ通っていた人たちでした。

彼らは皆、同じように混乱し、はっきりしない心の状態にありました。

彼らは、見知らぬ国で、知らない人々や知らない状況に囲まれてしまった者たちがそうするように、自然に集まったのでしょうか。

彼らは、互いに励まし合い、助言し合い、そして、新しく直面した問題を解決するために、互いに支え合っていたのです。

彼らは、事の意味、自分たちは何をすべきなのか、そしてそれをどのように行うべきなのかについて、何らかの結論に達しようとして、定期的に同じ集会場所へ集まり、終わりのない議論を続けていました。

その集まりでは、彼らは地上で教会の礼拝に用いていた儀式や形式のいくつかを守っていました。

しかし、その会合はいつも、誰もが勝手に発言する自由討論になって終わりました。

私はその議論のひとつに立ち会いましたが、皆がど

れほど熱心に自分の考えを述べようとしているかを見るのは、興味深いものでした。

ある背の高い男が立ち上がり、「では、ちょっと説明させてください。私はこういうことだと思っております」と話し始め、しばらく続けるのですが、すると別の者が、「いや、私はそうは思いません。これこそが答えだと確信しています」と言って、その話をさえぎるのです。

そしてその人はしばらく、自分の考えを述べ立て、その言葉を強調するたびに、右のこぶしを左の手のひらに打ちつけていました。

彼の話がある程度進むと、今度はひとりの女が口をはさみ、前の話し手の意見に疑いを表しました。

そうして、皆がそれぞれ自分の言いたいことを言い

終わるまで、同じことが続くのです。

全員が何かしら口にしたところで、彼らは始めたときと少しも変わらないままでした。

それから彼らは四方へ散って行きますが、また流れるように戻って来て、誰かが何か新しい情報を得ていないかどうかを確かめようとするのです。

私が特に興味を持って気づいたことが一つありました。

地上での多くの好みや偏見は、あちらにもなお残っているのです。ただし、それは成長を妨げるほど強いものではありません。

このようにして、人種や国民性によるまとまりが、たいていそのまま保たれていますが、その間には友

好的で穏やかな了解があります。

そうした人々は、自分たちの以前の生活のあり方を、より色濃く再現しているように思われました。

私は、なぜ東洋人が見当たらないのかと尋ねたときに、そのことを知りました。

彼らは、そうしなければならないわけではないのに、自然と一緒に暮らすことを好むのだとわかったので、私はその人たちの住む場所を訪れたいと思いました。

私は、彼らが、ほとんど自分たちの国で暮らしていたときと同じように生活しているのを見ました。家も庭も東洋風で、彼ら特有の礼儀正しき、優雅さ、もてなしの心が、私への心づかいの中にはっきりと表れていました。

彼らは私に、とてもおいしい果物と、実にすばらしい飲み物を出してくれました。

珍しい花々で満ちた、美しい東洋風の庭を歩くことは、この上なく心地よいものでした。そして、彼らが私にしてくれたことのすべてに、私はこの上なく感動しました。

私は、その感謝を示したいと思い、ささやかな贈り物を残して行こうと考えました。

私はそっとそうして、自分の思いどおりにうまくいったと思っていました。ところが、その場所の外れに来たとき、私の小さな贈り物を持った日本人の友人のひとりが、私の前に立っているのを見て、私はきまりの悪い思いをしました。

彼は微笑みながら、深くお辞儀をし、その贈り物を私に返しました。そして、私が抗議する間もなく、姿を消してしまいました。

もちろん、私はこの第一の世界のすべてを見たわけではありません。

しかし、私は、そこではどの霊も、自分自身の理想や心の向くままに生きる自由を与えられている、ということがわかるだけのものは見ました。

その人の運命は、その過去の人生によってある程度限られてはいるものの、基本的にはその人自身の手の中にあります。

しかし、霊的な隔たりというものは、あらゆる隔たりの中でも最も強いものなので、異なる種類の者どうしが入り交じることはできません。

もし地上に縛られた霊が、より高い霊たちのいる場所へ迷い込んだなら、その暗いオーラによってすぐにそれとわかってしまいます。そして、最初に出会った霊から、電気のエネルギーの流れのようなものが放たれ、それによってその霊は、自分のいるべき場所へ押し戻されるのです。

上へ進む道は、ただひとつしかありません。より高い種類の存在にふさわしい者となるために、自分で努力することです。

そのためにこそ、あの場所でのさまざまな活動は向けられており、またそのためにこそ、秩序と規律が保たれているのです。

なぜなら、誰ひとりとして、他の者の努力を妨げることは許されていないからです。

全体として見れば、上へ進もうとしている者たちの間では、生活は良く、心地よいものです。

しかし、完全に地上に縛られてしまった魂たちの、あの暗く希望のない状態は、言葉では言い表せません。

私は、「天国」も「地獄」も見ませんでした——それが霊の中に存在している場合を除いては。

「第二の霊の世界」

私は案内役とともに、次に第二の霊の世界へ進みました。

この広大な世界は、地上に縛られた魂たちがいないという点を除けば、第一の世界がそのまま続いているような場所でした。

そこに住む者たちは、さらに高い段階へ進むために努力していました。そして、多くの助け手の霊たちがいて、教え、助け、そして、新しく来る者たちが、それぞれのさまざまな期間をそこで過ごしながら、より高い世界へ進む準備ができるまで、絶えず導いていました。

そのため、そこに住む者たちは絶えず入れ替わっ

ていました。上へ進んで行く者たちの代わりに、別の者たちがやって来るのです。

その生活は快適で、それぞれの好みに応じてさまざまな形がありました。ある者は町に住むことを選び、別の者は野原の広がる田舎を選び、そこにある美しい白い家に、喜んで住んでいました。その家々は、非常に芸術的な造りと装飾を持ち、もっとも美しい花々が群れ咲く魅力的な庭の中に建っていました。

この世界では、より高い霊的な成長が、オーラの明るく淡い色合いにも、そこに住む新しい人々の理想の高さにも表れていました。

私が気づいたところでは、女性たちの服装は、病院にいた助け手の女性の服によく似ていました。また男性たちの服装は、私の案内役と同じような、トー

ガのように流れる長い衣でした。

というのも、第二の世界には、地上で一般的だったような服を身につけたいという望みは、もはや存在しないからです。それは、地上的な理想が弱まっていることの表れでした。

私たちは、そこには長くとどまりませんでした。

すでに説明したように、私は、自分の願いによって下の世界を見に行く前に、第三と第四の世界を訪れていました。

そのため、この二つの世界は、私が霊の世界で最後に見た場所だったのです。

「第三の霊の世界」

第三の世界は、美しく、輝きに満ちた世界でした。そのすばらしさは、この世の言葉では、とても十分に言い表すことができません。

そこに住んでいるのは、高く完成された霊たちでした。というのも、その場所へ入るためには、すでに非常に進んだ段階まで成長していなければならなかったからです。

また、そうでない者たちが入り込むことも不可能でした。なぜなら、その人たちの心の状態によって、そこにふさわしくないことがすぐにわかってしまうからです。

この世界の光は、あらゆるものに行きわたる、非常に強くすばらしい明るさを持っていました。そして、

それぞれの霊が放っている光と合わさって、その輝きは、まぶしいほどでした。

どこを見ても、驚くべき美しさが、見る者の目をとらえて離しませんでした。

そこは、大きな庭園のようでした。美しい色に輝く低木や茂みがあり、堂々とした木々が立っていました。あるものは壮大なヤシの木のようにあり、またあるものは、地上には見たことのない形をしていました。まるで、自然と芸術とが完全にひとつになって、見る者を楽ませるために作られているかのようでした。

幸福な霊たちの家のまわりには、花々が豊かに咲き乱れていました。その珍しく繊細な色は、香りとともに競い合っていました。そして、その香りは、「祝福されたアラビア」の香りよりもさらにすばらしいも

のでした。

そこには大きな都市はありませんでした。家々は二つか三つずつの小さな集まりになって建っており、それは、あまりにも美しい芝生と庭の中に置かれた真珠のようでした。その美しさは、人間の言葉では表しきれません。

ところどころには、堂々とした建物が建っていました。そこでは大勢の者たちが集まり、さらに高い世界から来る案内役や教師たちの影響を受けていました。その影響は、言葉によって、あるいはもっと微妙な方法によって与えられていました。

そこで着られている服は、とても簡素なものでした。ただ、流れるような長い衣があるだけで、それが、男性と女性の違いを表す程度に、少しだけ形が違っていました。

その衣の色は、いつものように、着ている人のオーラによって決まっていた。そこに現れるのは、明るく淡い色だけでした。たとえば、桃色、淡い橙色、クリーム色、淡い青、白、そして、それ以外にも言葉では表しにくい色がありました。

その衣の繊細な色合いと、風景のオリーブ色の緑を背景に、一面に咲き集まった花々の無数の色とが、まばゆい空気そのものを美しさに満たしていました。そのため、見る者の目は、その色彩の調和に心を奪われました。それは、偉大な音楽において、耳が音の調和に心を奪われるのと同じでした。

この幸福な世界では、そこに住む者たちは、地上では何世紀にもわたって議論されながら、いまだ完全には実現されていない、人類の普遍的な兄弟愛という問題を、すでに解決していました。

彼らは、ただ完全な調和の中に暮らしているだけではありませんでした。利他的な人々の夢が、そこでは実現していたのです。

一人ひとりが、他の者のために生きていました。なぜなら、その純粋な世界では、すべての者の利益はひとつだったからです。

たしかに、より知恵のある者たちが持つ大きな権威を見れば、ねたみや嫉妬が入り込む余地はあるようにも思えました。完全な世界であるならば、すべての価値は正しく認められなければならないからです。

しかし、ねたみを生み出す心そのものが、そこには存在しませんでした。ねたみとは、自分のためだけを思う心から生まれるものだからです。

その霊の世界では、誰もが、自分には完全に正しい扱いが与えられていることを知っていました。そして、一人ひとりが、自分より優れた者の長所を喜んでいました。また、よりすぐれた才能を持つ者たちは、自分に与えられたものを、謙虚に、ひとつの特別な恵みとして受け止めていました。

実際、このさらに純粋な世界では、能力や価値の違いなどというものは、その先に果てしなく広がっている、さらに高い世界の前では、取るに足りないことのように思われていたに違いありません。

愛と同情は、どんな不和も生じさせませんでした。

この世界から、助け手、教師、そして「あわれみの天使たち」がやって来るのです。彼らは、より低い世界にいる、不幸な者たちの間で働いています。

しかし、この奉仕は、義務として強いられたものではありません。

それは、彼ら自身の同情と、人のために尽くしたいという願いから生まれる、自発的な行いなのです。そして、その行いは、彼ら自身をさらに成長させる恵みともなっているのです。

「霊の子供たち」

私が霊の世界の中で、もっとも強い関心を抱いたのは、幼いうちにこの世界へ来た子供たちの霊が住んでいる場所を訪れたときでした。

その場所での体験のまわりには、私のもっとも美しい思い出が集まっています。

そこでは、霊の子供たちは、幼年期から青年期に至るまで、すべての成長の段階を経ていきます。

幼い子供たちは皆、地上から直接、第三の世界へやって来て、そこで身体と霊の成長を続けます。

そこでの私の体験は、驚くべき啓示でした。

その場所は、天上の輝きに満ちた、ひとつの広大な庭園でした。そして、その中には、実用のためのものや、遊びや楽しみのためのものなど、数えきれないほど多くの立派な建物が建っていました。

地上で母親であった経験を持つ女性の助け手たちが、赤ん坊や幼い子供たちを、深い愛情をもって世話していました。

少し大きくなった子供たちは、細やかな注意を払って教え導かれていました。そして、そのやさしさは決して尽きることがありませんでしたが、同時に、しつけをおろそかにすることはありませんでした。

さまざまな能力を持つ男性や女性の助け手たちが、さらに高い霊たちに見守られながら、その心を打つ仕事を続けていました。

もちろん、それ以上に完全な仕組みは存在しえませんが、それ以上に理想的な環境を想像することもできません。

目に入るものは、すべて美しさだけでした。そこには、心をゆがめるような醜さは、ひとつもありませんでした。

鮮やかな色の花々が、美しく工夫された花壇に咲き、完全な形と美しさを持つ木々が立ち、多彩な羽を持つ鳥たちが飛び、すばらしい味の果物が実っていました。しかし、それらは、この喜びに満ちた国が与えてくれる恵みの中でも、もっとも目につきやすいものにすぎませんでした。

茂みの間や、公園の中を歩いて続く道は、まるで神が設計したかのように美しく造られていて、その先には遊び場がありました。そこでは、幸せな子供た

ちが、助け手や教師たちのそばで遊んでいました。

そこには、美しさと、従順さと、愛の空気が満ちていました。

私は、植物や花を学ぶことが、子供たちに非常に熱心に行われていることを見ました。そして、それは、いつも花が咲き続けている庭の世話によって、さらに深められていました。

花がしおれたり、摘まれたりすると、たちまち同じ茎から新しい花が咲いてくるのです。

私は、この場所の美しさと不思議の中を歩きながら、絶えず地上のものと比べようとしていました。なぜなら、もちろん、地上はまだ私の家だったからです。

しかし、満足できるような比較は、何ひとつ見つかりませんでした。すべてが違っていたのです。

たとえば、私が歩いている地面について考えてみました。それは、地上のように固いのだろうか、と。

私は確かめるために、道から外れ、花壇のやわらかい土の上へ足を踏み出し、軽く上下に跳ねてみました。

すると、その地面は、湿地のように柔らかく沈む感じがしました。しかし、私の足は沈み込まず、地上のように足跡も残りませんでした。

この美しい場所での喜びを、さらに満たしてくれるかのように、私は、子供たちの中に、自分の妹を見つけました。彼女は、ほんの数歳で亡くなった妹でした。

私が、美しい道を進みながら、色と香りのすばらしさに心を奪われていたとき、ひとりの若い娘が、花を摘もうとしてひざまずいているのを見ました。

その人には、私の注意を引きつける何かがありました。私は近づきながら、じっと彼女を見つめました。

彼女は、十六歳か十七歳くらいに見えました。

彼女は、膝の少し下まで届く、簡素な白い服を着ていました。首と腕は、むき出しになっていました。

その甘く穏やかな顔立ちは、腰近くまでゆるやかに流れる金色の髪に囲まれていました。

彼女が花のほうへ身をかがめ、透き通るような指で茎を包んでいる姿は、心を打つほど美しいもの

でした。

私が近づくと、彼女は少しだけ顔をこちらへ向けました。そして、ほんの一瞬、私たちは互いの顔を見つめ合いました。

私は、その瞬間に、彼女が、私のひざの上で死んだあの幼い妹であり、今では霊の世界の若い女性となっていることを悟りました。

彼女の顔には、深い驚きが浮かんでいました。まるで、「えっ、あなたもここにいるの?」と言っているようでした。

その目には、やさしい愛が輝いていました。

私の気持ちは、あまりに強く、私自身を圧倒するほどでした。

私は立ち止まり、何かを言おうとしました。しかし、不思議な力が私を黙らせ、そのまま先へ進ませようとした。

私は立ち止まることができませんでした。それでも私は、何度も振り返って彼女を見ました。

彼女は、花のことなど忘れて、その場にじっと立ち、愛と、甘くやさしい驚きの入り混じった表情のまま、私を見つめ続けていました。やがて、私は彼女の姿が見えなくなるまで進んで行きました。

再び、地上の人間らしい好奇心が、私の中にわき上がりました。私は、そこに美しく実っている果物を食べてみたくなったのです。

そう思ったとたん、濃い葉の茂みの中から手が伸

びてきて、私にリンゴを差し出しました。

私は、その手の持ち主の姿を見ることはできませんでした。

私はそれを食べてみました。すると、私の感覚は、地上のどんなものにも似ていない、すばらしい味に満たされました。

私は、子供たちの国を離れ、この世界のほかの場所を通って行きました。そこでは、高く成長した霊たちの群れの中を歩きました。堂々とした庭園の中には、果てしなく続く大きな住まいが並んでいました。

私は、この驚くべき世界の広大さに、心をいっぱいにしていました。そして、キリストの言葉が思い浮かびました。

「わたしの父の家には、多くの住まいがある。」

この不思議な霊の国の輝きは、比べるものがありませんでした。

そこは、考えられるかぎり、もっともすばらしい天国のように思われました。そこには、普遍的な平和と、同情と、幸福の空気が満ちていました。

愛が、すべての上に漂っていました。

どれほど楽しかったことでしょう。ひとつひとつの住まいの前を通りながら、霊たちが、過去の悪や苦しみに打ち勝ったことによって得た恵みを、喜んでいる様子を見ることは。

私は、この並外れて静かで魅力に満ちた光景に心

を震わせ、魅了されていました。そして、木にもたれ、花と豊かな植物に囲まれた庭の中で休んでいるひとりの霊に、どうしても話しかけずにはいられませんでした。

その人の目には、この世の人間には感じることも、想像することもできないほどの、深い心の平静が表れていました。

その顔には、輝くような幸福があふれていました。

すると彼は、まるで私の驚きの言葉に答えるかのように、こう言いました。

「ええ。これほどまでに大きな地上の苦しみ、多くの試練、激しい悲しみ、胸を刺すような悲嘆を経たあとで、この輝かしい世界に住むことを許されるとは、何と表しようのない喜びでしょう。」

すると、また別の願いが、私の中に生まれました――音楽を聞きたい、という願いです。

私は、芸術的に作られた高い建物へ案内されました。その建物の上部全体は、舞台のように造られており、そこには巨大な楽団が座っていました。

その楽団は、あらゆる種類の楽器でできていました。その中には、私にもわかる楽器もありましたが、見たことのないものもありました。

その楽団だけでなく、同じような多くの楽団が、たびたび演奏会を開いていました。そして、どの演奏者も、自分の芸術の真の名人であることを示していました。

やがて音楽が始まりました。すると私は、その壮大

な響きと、圧倒されるほど深い感情を呼び起こす力によって、たちまち心を奪われました。

私は、それに耐えることができませんでした。おそらく、私はまだ地上の人間だったからでしょう。

私は完全に圧倒され、そこから連れ出してもらわなければなりませんでした。

私の案内役は、今度は、私にとって非常に興味深いものが待っている、遠く離れた場所へ連れて行きたいと思っていました。

私たちは、身体を垂直にしたまま、少し地面から浮かび上がりました。そして、意志の力だけによって押し進められながら、空間をすばやく進んで行きました。

進んで行くあいだ、私たちの下には、驚くべき光景が広がっていました。

淡い色をした霊たちの家々は、さまざまな建築様式を持ち、見事な芸術的装飾に彩られていて、この世のものではない輝きに満ちた光に包まれているように見えました。

そのまわりには、花や低木や木々のある庭園が広がっていました。その色合いや配置は、人間の庭園設計家が作り出す最も完璧な作品さえ超えています。

ところどころには、大勢が集まるための大きな邸宅や宮殿が、木々のあいだから姿を現していました。それらは堂々とした大きさを持ちながらも、色彩は繊細で、線の美しさに満ちていました。

鮮やかに輝く花々と、広く平らな芝生の濃いオリーブ色の緑を背景にして、その芝生の上では、多くの霊たちが、光とさまざまな色に輝く衣をまとって絶えず動いていました。そうした中に立つこれらの完璧な建物は、形と色の調和を生み出していました。その調和は、まるで完璧な音楽が魂をとらえるように、私の心を引きつけ、離しませんでした。

やがて私たちは、広く平らに開けた場所に着きました。遠くを見ると、そこには、さまざまな色の花が一面に咲いている大きな花壇のようなものが見えました。

私たちは降りて、その場所へ近づいて行きました。

近くまで来てみると、私が花壇だと思っていたものは、実際には、明るい色の衣をまとった大勢の女性の霊たちであることがわかりました。

彼女たちは、大きなアーチ型の建物の前に立ち、何かが起こるのを待っているようでした。

私は、彼女たちが「助け手たち」であり、「あわれみの天使」として、地上や、より低い世界へ送られるのを待っているのだと知りました。

そして、ここは、助け手たちが指示を受ける場所のひとつにすぎない、ということも知りました。

そこで私は、こうした奉仕を行う天使たちは、必要とされる時にはいつでも働けるよう、数え切れないほど存在しているに違いない、と考えました。

私は深く興味を引かれ、近くにいた霊たちを、もっとはっきり見ようとして近づきました。

私は、彼女たちが、自ら進んで引き受けたその仕事に、実にふさわしい存在であると感じました。

その美しく穏やかな顔には、温かい同情の心があふれていました。

彼女たちの目に宿る神のような愛と優しさは、彼女たちのすべての行いを動かしている原理を、はっきりと物語っていました。

言葉や態度からは、どうしても抗うことのできない奉仕の呼び声に急いで応えたい、という気持ちが伝わってきました。

彼女たちは、足元まで流れるさまざまな色の衣をまとい、頭には、それぞれのオーラの色に染まった頭飾りをつけて立っていました。その姿は、見事で、実に美しいものでした。

その明るく淡い色彩の豊かな変化と、顔から流れ出る輝く白い光、さらに女性らしい優雅さとがひとつになって、驚くほど美しい光景を作り出していました。

やがて、その集まりの上に静けさが訪れ、すべての目が、期待をこめて、今しがた現れた三人の威厳ある姿へ向けられました。

それは、さらに高い世界から来た男性の霊たちで、助け手たちに指示を与えるために来ていたのです。

彼らは、輝く衣をまとい、高い威厳を漂わせていました。

彼らは、集まっている者たちの前に立つアーチの下

を通り、その上へ姿を現しました。そして、そこから
助け手たちに指示を与えました。すると助け手たち
は、一人ずつ、あるいは何人かの組になって、すぐ
に、喜び勇んで自分たちの務めへ向かって行きま
した。

私は、この光景を見る幸福を与えてくれた案内役
に、深い感謝を覚えました。

なぜなら、私にとって、この光景は、地上で思い描
いていたどんな「天国」よりも、はるかに現実的で、
心を慰めるものだったからです。

こうして、私が第三の世界を離れる時が来ました。
そして、私は、まもなく地上の身体へ戻らなければ
ならないことを知っていました。

しかし、その前に、私は案内役に、せめて第四の世

界の輝きを、ほんの少しでも見せてほしいと、熱心に願いました。

うれしいことに、彼は承知してくれました。そして、こう言いました。

「あなたは見ることになるでしょう。」

「第四の世界」

私たちが第四の世界へ近づきながら降りて行くと、その光景の輝きによって、私の目は、ほとんど見えなくなるほどでした。

あらゆる方向から、無数の霊たちの群れが集まって来ていました。彼らは、驚くほど大きく、美しく、壮麗なひとつの建物へ向かっているようでした。

どの霊も、自分自身から放たれる、燃えるような白い光の球に包まれているように見えました。そして、その光は、この世界そのもののまばゆい光に、さらに強い輝きと力を加えていました。そのため、私には、その明るさは、ほとんど耐えられないほどに感じられました。

そこでは、霊たちは、それぞれのオーラによって色

づけられた衣を着ていました。その色は、自分から放たれている光によっても隠されることはありませんでした。女性たちは、豊かなひだを持つ長い衣をまとい、男性たちは、身体にぴったり合った服を着ていました。

その光景は、驚くほど美しく、言葉では言い表せないほど輝いていました。

ほとんどすぐに、私の案内役は、動いている行列の列の中へ私を連れて行きました。そして、まもなく私たちも、ほかの霊たちとともに、その霊たちが向かっていた壮麗な大広間の中へ入りました。

そこは、巨大な講堂でした。高くなった演壇を囲むように、半円形に造られていました。

係の者が案内しているようには見えませんでした

し、権威を示すような様子もありませんでした。しかし、大勢の霊たちは、きわめて整然と、自分たちの決まった場所へ着いて行きました。

私と案内役にも席が与えられました。そして、期待しながら待っているあいだ、私は集まった人々を見渡すことができました。

まず何よりも強く感じたのは、すでに述べた、言葉では言い表せないほどの、圧倒的な輝きでした。

それは、この世界そのものが持っている自然の光、顔から放たれる白い輝き、その人々を包む光、そして、光り輝く衣を無数の色に染めているオーラとによって生まれていました。

それと同じくらい印象的だったのは、彼らの顔から受ける精神的な印象でした。彼らの顔は、知性と力

に満ち、さらに、同情と愛と理解によって輝いていました。

というのも、これらの霊たちは、ただ自分自身を完全に支配することに成功しただけではなかったからです。彼らは、私にはかすかに想像することしかできないような神秘についての知恵と知識にまで到達していたのです。

自分が、そこにふさわしくない存在であることを意識して、私は、自分というものが、まったく取るに足りないもののように思えてきました。

私のまわりでは、霊たちの小さな集まりごとに、会話や議論が行われていました。その議論は、重要で、非常に深い意味を持っているように見えました。

私は、ここでもまた、霊の世界のほかの場所と同じように、男性たちが指導的な立場にいることに気づきました。

しかし、それは、男性たちが女性たちを支配しているということではありませんでした。男性も女性も、それぞれ自分にふさわしい場所を持ち、それぞれに果たすべき使命を持っていたのです。

男性たちの仕事は、より創造的なものでした。一方、女性たちは、それを守り、実際に生かしていました。

男性は運営し、女性は美しさと優しさを吹き込みます。そして女性は、あわれみの天使であり、慰めを与える者であり、教師であり、母のような霊でもあるのです。

このように、霊の世界では、男性らしさと女性らしさの違いは、服装だけでなく、ふるまいや習慣においても、はっきりと現れていました。

女性の慎み深さと優雅さは、男性の強さと権威と対になっていました。

やがて、五人の男性が演壇へ上がると、集まっていた人々の上に静けさが訪れました。

彼らは、私がそれまで見たこともないほど輝く衣をまとっていました。そして、順番に話し始めました。

その場にいたすべての者は、心を奪われたように聞き入り、その言葉に夢中になっていました。そして、無意識のうちに、さらに近くへ身を寄せ、明かされていく不思議を知りたくてたまらない様子でした。

私は、その内容を何ひとつ理解することができませんでした。それは、私の力を超えていたのです。

それでも私は、その場の影響を強く感じ、あの驚くべき見知らぬ人々へ、もっと近づきたいと願いました。

私は、人々の中を動いて近づこうとしたため、少し騒ぎを起こしてしまいました。

すると私は、咎められ、非難するような目で見られました。とくに、そこにいたどの霊にも、私が本来そこにいるべき者ではないことがわかっていたからです。

私のすぐ近くにいたひとりの霊が、厳しい声で言いました。

「ここは学びの広間です。誰であっても、騒ぎを起こすことは許されません。」

しかし、私の案内役が、私の代わりに説明してくれました。

「この霊は、まだ完全には地上を離れていません。特別な目的のために、ここへ来ることを許されているのです。」

その説明に、まわりの人々は納得したようでした。そして、理解したというつぶやきが聞こえました。

私は、自分の興奮を抑えようと努め、話し手たちが話し終えるまで、静かにしていました。

やがて、大勢の集まりは、静かに、整然と解散しま

した。そして、私と案内役は、私が望んでいたとおり、第一の世界へ向かう長い旅を始めました。

私は、第四の世界については、ほかにはほとんど何も見ませんでした。

しかし、私は、そこでの生活は、第三の世界の生活によく似ているものの、それよりもさらに発達し、さらに完全で、さらに輝かしいものだと聞かされました。

「宇宙の深淵への私の訪問」

私が霊の世界のさまざまな場所へ旅したのは、それぞれ別の時でした。そのことを理解していただかなければなりません。もしそうでなければ、私は長く身体を離れすぎてしまい、その結果、肉体は死んでしまい、私は早すぎる時期に、霊の世界へと留まらなければならなくなっていたでしょう。

そのため、私が宇宙の広大な空間へと最後に旅したのは、第四の世界から戻ってきて、しばらくたってからのことでした。

私には、この旅が、これまでにした中で、はるかにもっとも長い旅であるように思われました。というのも、私が見てきた四つの世界は、私たちの太陽系から、それほど遠くない場所にあるように感じられたからです。

いつものように案内役に伴われて、私はまず、私たちの太陽系の空間を通り抜けました。

私たちが金星へ向かって飛んでいるとき、私は、地球をはるか遠くに見ました。それは、大きな黒い球のように見えました。

私たちは土星のすぐ近くを通りました。すると、その環を作っている小さな球体が、大きな球のまわりを急いで回っているのを見ることができました。

やがて、巨大な黒い球が通り過ぎました。あるいは、土星を追いかけているように見えたのです。

「踊り子を追いかける恋人のようですね」

私はそう言って、人間らしい軽い冗談を口にしまし

た。

案内役は、私のささやかな冗談には、まったく取り合おうとしませんでした。

「あれが」と彼はそっけなく言いました。「あなたが木星と呼んでいるものです」

私たちが金星の上を通ったとき、私たちは、顔を下に向けたまま、地面に近いところを、水平方向に浮かんで進みました。

そして、半分ほど進んだところで、私たちは完全に止まりました。

そのため、私は、この惑星を間近で観察する、すばらしい機会を得ることができました。

それは、暗く陰気な世界のように見えました。その地表から立ちのぼる蒸気の雲の向こうに、奇妙に縮れたような植物が、陰鬱に見えていました。

無数の昆虫が、大きな群れになって飛び回っていました。

「なんという蒸気でしょう！ なんという虫の多さでしょう！ こんなところには、とても誰も住めないでしょう」

私は叫びました。

昆虫のほかには、私は、生命のしるしを何ひとつ見ることができませんでした。

海も山も見えませんでした。ただ荒れ果てた、不毛な大地があるだけでした。

その光景全体は、恐ろしいほど陰気で、完全に見捨てられたようで、そのあまりの寂しさに、私は圧倒されました。

やがて私たちは、太陽系を離れ、宇宙の深淵のはるか奥へと進んで行きました。そこには、信じられないほどの速さで動く無数の星々がありました。そして、それらは、私たちが近くまで来ていたために、考えられないほど強く、数え切れないほどに輝いていました。

その光景は、人間の想像力に挑みかかるようなものでした。

しかし、私は、その巨大な物質の世界を近くで見て驚いた以上に、宇宙を満たしている無数の生きた存在に、さらに深く驚かされました。

第四の世界でさえ見たことのないほど、高くすぐれた力と権威を持つ霊たちが、あらゆる方向を、一人で、あるいは大小さまざまな集団となって進んでいました。

どの霊からも、非常に強い白い光が放たれていました。そして、その光は、その霊を燃えるような輝きで包んでいました。その強さは、その霊の持つ力の大きさに応じて違っていました。

彼らは皆、輝く白い衣をまとっていました。

そのようにして生まれる光の輝きが、宇宙全体を満たしていました。

渦を巻く巨大な星々でさえ、この畏怖を感じさせる光景の前では、取るに足りないもののようにでした。

その壮大な霊たちの姿を、たとえ遠くから見ただけであっても、それだけで、その人たちが、物質の世界と霊の世界の両方を支配し、導いている存在であることがわかりました。

その人格からあふれる圧倒的な力に、私は完全に圧倒されました。私は、ただ呆然と見つめ、身をすくませ、その存在の前に震えていました。

とくに、一人の男性の霊と、一人の女性の霊は、二つの燃える太陽のような光を放っていました。その白い輝きは、近くにいるほかの霊たちの光を暗く見せてしまうほどでした。

その二人が、威厳をもって私のそばを通り過ぎたとき、私の心には、こんな言葉がひらめきました。

「そして、彼らの中には、もはや闇は存在しない」

私は、そのまばゆさに圧倒され、思わず身をかがめました。そして、無意識のうちに、敬意と畏れのしるしとして、額に手を当てていました。

私は、その二人から、どれほど離れていたのかを言うことはできません。なぜなら、霊の身体には、空間による制限がないからです。

しかし、近くであろうと遠くであろうと、私は、その顔に浮かぶあらゆる表情を、はっきりと見ることができました。

彼らは、純白の、見事な衣をまとっていました。

女性の霊の服は、長く流れるような衣でした。彼女が、膝を少し曲げ、身体を垂直に保ったまま浮かん

でいると、その衣は、やわらかく美しい線を描きながら、その身体から波打つように流れていました。

男性の霊の服は、足元まで届く、身体にぴったり合ったトーガでした。

彼も同じような姿勢で進んでいましたが、頭はさらに大きく後ろへ反らされていました。

その目は、差し伸べた手の先を追うように、遠くの大きな星に向けられていました。

彼は、ある大きな神秘について、自分の伴侶に語っていました。その姿は、まさに権威と知恵そのもののようでした。

しかし、その顔には、霊的な愛のやわらかな光が浮かんでいました。そのため、その厳しさも、天上の

光によって和らげられていました。

私には、彼は、全能の存在のように思われました。物質であれ霊であれ、どのような力に対しても、ただちに従わせることのできる存在に見えました。

彼の伴侶も、彼に近いほどの霊的な力と権威を持っていました。しかし、彼女の持つ同じような力は、女性らしい優雅さと美しさによって包まれていました。そのため、その顔は、静かな気高さに満ちた、崇高なものとなっていました。

彼らは、完成された霊というより、むしろ神々のように見えました。

それでも私は、彼らも、かつてはどこかで、人間の姿をして生きていたのだと知らされました。

彼らの結びつきが、そのときに始まったのか、それとももっと後になってからなのか、私は知りません。

しかし、今では、彼らは、霊的な引き寄せと愛の絆によって、永遠に結ばれていたのです。

霊的な成長によって、彼らは最高の力にまで達していました。そして、案内役の説明によれば、彼らは今や、物質の世界と霊の世界の両方を支配し、導いている、あの最高の力の一部となっているのです。

周囲にいた多くの霊たちは、深い尊敬と畏れをこめて、彼らの後ろ姿を見つめていました。

私にとって、この驚くべき存在たちを目にし、その近くにいる幸福を知った瞬間は、実に輝かしい時でした。

私はしばらく、その場に動かず立ち尽くし、消えて行くその輝きを見つめていました。

その二人が見えなくなるにつれて、その光も次第に弱まって行きました。やがて私の目には、遠くに、彼らを包んでいる白い光だけが見えていました。

(終わり)